春木亭琴集 探注

特別
イ4
3163
98(4)

貴
14
3163
98(4)

徳川圖書

散木奇歌集 巻第九

雑部 上

堀河院御時添金

そらかきつらねて頭雑事資のもとへつかはしける

金葉 日もすがら御ふみ」後重ね式部卿宮文をよ

是をだに見してぞ用防内侍をもてこれかしをよ

と侍りもそれいふやうもをひめつきさぬかしきをれいちそはく

法皇をそれいつるぬ

公事根源云京官除目是ハ三月三日より先ず行ふ事なれど今ハ秋の除目ぞと云めり冬もあるべきにあらず故ハ京官を分ちて春秋の除目をとりおこなふべきにや

辨官補任云左中辨従四位上源重資康和二年七月十七日補蔵人頭

周防内侍父平棟仲

後拾遺雜三　馬内侍
そらそらしかりしきおいの世の中を
うきふしわかのみかりそめ

詞花集恋上　隆縁
身のほどを思ひしりぬることのはを
つゝみかねたるうたゝねのかさみけるころ

金葉
おもふ人ありとはいはじ嵐ふき
袋冊子　まさい
たえてさやけき新い夏のみそぎ
そゝぐ　金
のちのこひもしるからなくに
云ヽ金
おもひ草まくらにしげるさとなれや
絶果かたもなき袖を枕として外のうき事をうれへつゝ
下簀なるうたゝねてみる夢路人のうつゝを
年をへて身いたづらに成ぬとも世ゝにもふるはなみだなりけり
風ふけば胡ぞの笛のおとまでもあはれをそふるあきの夕暮
おもひきや外のふるまをながめつゝ伊勢の國にすまりて
ことのはのうつりけるふれいおほくやまを
ふかくやまを

古今集恋一
音羽山おとにきゝつゝあふさかの
関こえてやゝきく新い夏のみそぎ
木哥八年と侍るに年ふりぬる
恋ゝにかはらぬ
經ぬるもおもひ鈴虫の
なりけり

熊代翁云磯間の松の根ハ狭くのびゝ
うねるゆへ意也て俗言のセマクも無狭くしき
よりいひて意轉して倉卒のさまゝ
かさゝハ假字ぞとかゝるさま

萬葉集三巻
芙沙居石轉尓生名乗藻乃名者告
者妹尓如不相
信濃漫録云万葉巻上妹之髪上小竹
葉野乎云々千楢云是ゆけなる葉歟と
よむ一ゝあやしなゝと云意ゆかる河
北那能奇語云明題集あけきりのたつ
〳〵ゑ寺堀川百首ゆあけさくえ歟ふゝめ
あけさゝえ歟六津ゝ国の名所ゆて名所集
沙也由ゝ
萬葉集ゆ盤金乃凝敷山乎超不勝
而とあるにて一きやまこえんともこと
後世ゝゝくよゆいひゝゝと

詞花
後葉
ゆふのうつりかはるやくれかたの
百首の歌中
堀河院女御
しかのねなきてつゝ
百首の歌中
堀百　万代
みさとあれてすむ人もなき秋の
夫木　類題
鶉
堀百　万代
綱引のたえまもしらぬ秋の根の
夫木　類題
山
堀百　類題
いくへをりかさねてゝ山をかつ見る
夫木

絶廉山寺のうちゆふ華ゆりてあや
堀河院女御
しかのねなきてつゝ
百首の歌中
堀百　万代
みさとあれてすむ人もなき秋の
夫木　類題
鶉
堀百　万代
綱引のたえまもしらぬ秋の根の
夫木　類題
山
堀百　類題
いくへをりかさねてゝ山をかつ見る
夫木

万葉十巻ニ足川水阿和逆纏行水と
よめりいぬきは水渋之
新呉竹集云たてむつゝさは山川の岩なみに
きこらみてあみたる筏の行かやそてたく
なる之
萬葉集十巻
小墾田之板田乃橋之壊者従桁将去
莫恋吾妹 板ハ坂の誤なるへし記伝名蹟
考ニ治田宮ノ条考へし
和訓栞云たしかく係氏うちかふくえさ
りなるにて立退の義なるへしさての反
ゐ之辟易の字をむし通鑑集覧ニ
辟易驚却皃とみえり
難勅撰云恋しといふとてそふこと云て
是ハ堀川院ニ奉る百首の内なるを後の
哥の端詞にふしさかけて上の句を
むつけられたる心ありし散木集よいえ
てをみつくあらふしいはるそくへの誤て
加へたるへしたまきるの言又おほ
つかなし
熊代翁云足川を山とし玉鉾を道とせし
此ひの例ありふ玉きはるの発語をかく用たる
るハこゝろしらかしぬらへるとかくみ
えるふ
新古今雑下端書 述懐百首哥よみ侍
りける
身を知雨ハ思ひわへ身をしらぬかいひ
降雨之又伊勢物語云古今伊勢物語を
そしめ後拾遺新古今続千載新勅撰
伊勢集拾遺愚草拾玉集などにもみえし
る雨とよめる哥をみえたり

河

新拾 類題
万代 夫木
大井河みなきりまくいは波にたくむいかたのはやきせのおとや

橋

堀百 類題
夫木
絶る夕はつなふいつれ橋かみいきえたえてたえるふかり

懐旧

新勅 堀百
遊しらいそてるみたかきをみそうかむしわちらはい

夢

新古 類題
堀百
さそふのいとるさる身の程をたへいきのんちらてそ枕

雨

風雅 類題
堀百春雨
つくしとたへいかりし数をすねみをくる雨の音をやみくるふさまよ

侍賢門院
夫木
あらやせむゆうちやわらかしあつなちの
ぬらちのせきのよふこそうるゝ
元服の事ハ江家次第ニ詳なり
万葉七ニ未通女等之放髪乎木綿山さ
ある放髪の訓ふるけりみをよみれとし
ぬりのかみそよむへしるねからみいやて
之
涤川をゐきをめり川とよめるハ布留川を
袖ぬる川と云之涤川ハ筑前国御笠郡
天満宮の南ニあるふ川也とそ
志賀山越ハ古今集ニ春ニも秋ニもよめり永
久四年の百首ニ春の題ニ出されたるを始て
六百番哥合其外ニも春の題ニ出されたるを始て
志賀山越ハ小白川の側より登りて如意
か嶽越ニ志賀へ出る路也といへり
奉白集
くちなしの色やゑをしるへからく
えもいはぬ色をそちらる
林葉累塵集 忠秋
ぬしのなふたを川雲のくちなしや
時をもいはぬまけするらむ
奥儀抄云雪けの雲ハきちのふらむとて
黄雲の事也
梔の色の雲ハ吉事の雲也穀玉集二編ニ
只ハ一の色ニ白めし夕雲やそをハ紅也
の哥ニ例なり
和哥分類云青竹ハ笛の名也 江談
春宮轉上文已注

ちふこゆり

元服

堀百 月詣
夫木 万代
東路のかとりの宮よふとむすひつくへき我身なりけり

志賀山越

永久百首 類題
夫木
うなゐ子かおなの髪をそれたてて白くなるまて契りてそ祝なれ

雲

永百
志賀の山ちをまちこえ道をよるよもすからひつまのれ

笛

永百 類題
夫木
くちなしの色にそめぬるくもなれや雪けの空にみゆる年

永百 類題 柳イ
夫木
あさ竹かこゑの上人ふさきてもその音をへつつすなり

こゝや

永百 類題 夫木 なつのきぬすゝしきものゝうちかけてこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

永百 夫木 のりかみ

永百 夫木 きりてうすたつのうちかけてこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

夏七夜

永百 類題 夫木 ハ夫 夏ら代をかへひのうちかけてこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

頭注 ○顕注密勘云、此歌は、七夜の祭の時、庭に敷物を敷きて、其上を歩ませて、祭るなり、

永百 類題 夫木 時刻 たつねのかさゝよりからけおくらせいおんそでのうちを旬や

堀百 類題 暁 ぬかりきてたつねよかしねきれよ

永百 類題 夫木 たつねのかさゝよりからけおくらせいおんそでのうちを旬や

永百 類題 夫木 あをやの

永百 か 夫木 類題 いそのめいの岩よりかけてこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫 ふ永

寺

永百 類題 夫木 そこめきてこの門もりの氏寺をゆるのこゑ〳〵こゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

猿

永百 類題 夫木 神中 たゝみそのいそもあやしこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

永百 類題 夫木 山河の岩ねのきはせゝらぎをこゝやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

松系

永百 類題 夫木 きくふのうらなれそのあれおそきれたそこやふむせよ夕ゐれいけもいよもらぬみそのの夫

初句諸本岩のうへにせう 夫木集ふいのりのことそうちかうこゝやふむ

玉勝間云そこもかゝる罪といふ仏書ゟ無始よりの罪ことよふ夏そこの無始ゟ無うへ始てつゐ

神中抄云猿ゟ異名多し一或ハたゝみそのゝ目寺廷ゟたゝみそのゝ猿ゟ云ふ篠目ゟ古ハたゝみそのゝ猿ゟ云ふ丸をゝ丸ひろ〳〵ゟ云ふの寺の鴻ゟや

日本紀哥解云佐瑳餓泥能ハ小竹之根之也根ゟ云発語ゟ組ハ闇ふて数くゝりあるゟを云ふ今ゝ多毎ゟ山名のゝ郎ハ隠りゟ竹するを俣せ考へ冠辞続歌語ゟしてあるさまの考あり

陸璣詩疏云喜母此虫來著人衣當有親客至有喜也幽州人謂之親客亦如蜘蛛為羅網居之是也
巻懐食鏡云志久知此物河鯛之類也其口唇甚赤俗呼之赤口其性味同之海鯛
志くちハあかめと云魚にて漢名赤目魚と閩書にみえたり
あこハ志摩国英虞郡にや
いやみハいやめにや源氏早蕨巻に新しき年ともいはすいやめになむ成のてと
とすのそいも云てゝ云り月日をへて出逢しさやかなていと泪かちなるさかの目つきをいやめといふ也といへり
えとくの浦ハ淡海にあるへし新羅社哥合に
おもへともえとくの浦のあまのこは
うつしてなくる枝のよひ月
曾丹集
そそえそたる小篠か原のそよさしに
人とみるかなきけらんかは
まきハ柘にて枝なき木をいへり廣韵に枳ハ樹無枝也と云源氏帚木巻に
はゝきゝの心をしらてそのはらの
よなみ下なるまきの枝のあまけ
かのよりやしよかり
山家集
庭の岩にめたつる人もなかりけし
かとあるさまにたてしおけるは

くも

永百 类題
さゝかにはかけの枝にゆふまくとまちたのめてはくる人もなし

杉きれ

永百 夫木
志くちひくあこのあまや身に年ふりていやみに成はしかられつゝ

水海

永百 夫木
夕つく日えとくの浦のいりうみにくもすゝしてみのもとらけむ

薪

永百 类題冬二
いまそしるまき木は成し昔よりたきてられむ日をそかたる

石

永百 夫木 类題
石はさはたてる人のたえかしこまりしてみえもあらての那

神中抄云かゝりてぬさすいさりしてかくとハ縄をかくふかゝりてしてのゝ網の大縄をひく小舟の縄をかみてむすひ右の縄をハ沖にてあみにつきて
ひきあけてかゝりてゆくなり沖にていさりするやうにてわさ
ほたかれてしるやうにゆきてかうのかゝりて
手くふたちてよりてひけハかみてもをりて
いつかりてかゝりてなかなかにあるいはなか
つけていつくしけたくたらこかゝりても
下てかかむなる同すハ此哥ハかみてとよめる
也ちかいかくあやめさをとこのさき
ふかけてかてとせうち源氏ハぬさとふある
まゝ出されハかくもあるそ
金葉雑上
天川これやおのれのちかひしむ
そくわりおつる布川のしき
冠辞考云万葉七小夏麻引海上滷乃云々
陸田ニ生立たる麻を六月ニ根引もれハ
夏麻引とひつけたり海上ハ和名
鈔ニ上総国ニ海上郡あり
熊代翁云我紀ノ国牟婁郡本宮わたりは
てかしらをかイスと云りするなる故なと
らもふへて此処の俗言ニ人の口真似する
をガイスといふ此島何の声をもよく似ね
それハガイスといふとて云り言の本ハ志る
と一つの方言にてあるし
枕冊子云文の五節云々春曙抄云一条
禅閤宗祇ニ伝授の大嘗会ノ説云忌
と云ハ神事の衣服也白き布をそりて山
藍と云草にて摺木をはりつけ也大かた
狩衣の如し云々

海人

永百 神中 类題 夫木雑五同上
ちくしぬのあまのうけ舟漕出てかゝりてぬさすいさりしてかく

池

永百 类題 夫木
よにふれひてかみたちあちにあそひしとあそふの池はぬきさたてなる

瀧

永百 夫木
みねはれてそこのもれぬめの庭や雲より落る瀧のしらいと

志ひしは

永百 万代 夫木 类題冬二
みむろ川をひくらちかみ山の椎柴よかしもはらぬ夕あらしして

をとめこ

永百 夫木
いはしめかららみのをとこふるしやりて久しくなき神を思ひこそしめや

賦役令云凡調ハ絹絁絲綿布並随郷
土所出
貫之集
今年おひのふひくハ白妙のからころも
千代をかけてそいはひそめつる
新撰六帖
八少女の袖ふるよりも神のころもし
ものやしろハみやゐせりとそ
下句ハ言の命を能口走せてつき物のし
たる如く神明憑して事を託宣す
るを
拾玉集
よしの山とをくもしらぬ人まてもみれハ
神よしも花のあるしなりけり
新撰字鏡云惰平夏良伊支止呂志
又祢太之
熊代翁云今強て按に三ノ句ハ水捺て狭
かきて積て今の俗に舩の墨と云処荷
物積られ舩足入て水にひたりて水
際を捺りやくなれハ其処を水捺と云
其水捺に水の漏るを狭ふと云ふ
あかふハ贖之万葉にあかふ命もとあり
罪を贖ふ物をもて命をあかなふる
ことを云ひて過料といひてある法令の
事を按にいふをそへて誤ふてゐる
小舟のなかくとはるとおもふあるかし

みつきもの

永百 夫木
みつき物ふひくハ白妙の糸をもてくるしもたえすそ運ひつるかな

やしろ

永百 夫木
いのる事かみのやしろにうけられしとおもひやちかふ神のしるしも 和訓栞

こ形星

永百 類題
かきこしにあのつくらふま袖を移くも梅のあし形の乱

清字

永百
投えまてえひろほともみやうゆつるや楢のいもを形うら華

船

永百 類題 夫木
なかしうれよ見んちらちらも女よやさつみてあそふ女袖のおもしておもひそ

熊代翁云へらふりハへさきるさし云意之
云へてらハ其事物の然してあるをみと
いふ言にて野らくも野のさるめる意にて
よらのよらも夜のさかの意をようらた
ひら其外しと多し此ら云のてさしさ
むらかるへこさりうたひらこと
云り又俗言ニ雨ラシイ日ヨリラシイ抔云
らも同し
拾遺集 躬恒
三千年になるてふ桃のことしより花さくはるにあひにけるかな
漢武故事云西王母降出桃七枚自啖二枚五枚与帝帝留核欲種母云此桃三千年一開花三千年一結實
船用集云舳艫トモオモテとよみ表を
もてと云事昔より云ところ
かく今舟を如て艫ともおもけりお
古今集彼のしらやおかれせ
金葉集詞書 下﨟にてあられてなけき
侍りけるによめる
続後拾遺 基夏
いふせむかはさしくも池水の
身をうき草ハさそふ水もなし
詞花集端書 女もとの沢にて菜つむとて
たゝそてよめる
万葉集ニ山田之澤ニ惠具採とよめり

うき草

永百 類題
かくれ家ハ深きうき世をそやくしてと思ひつるかな

仙宮

永百 類題 夫木
白ちぬる衣の袖ハぬれたれとみちこそへたて枕も吹けるかな

夫木
たは年をかさねて

夫木
うし舟のともつなのよるの波におかれたるかな

思ふ事侍る比よめる

金葉
せきもあへぬ涙の川ハはやけれと身のうき草ハ流れさりけり

ゑくの心を

詞花 後葉
志ら川のめかくつむ沢の芹おいつみて妙なき我身なりけむ

和名鈔深色部 拾疾条云今按俗所謂椿疾寺是也
萬葉集十二巻
古者以指物曽海石榴市之八十街
尓相兒哉誰
夫木集　仲正
花ふくる山つゝじをりつゝも
たゞならぬ心所ふやくもも
一二句ちがへて椿の枝の我分とも
こゆるかな云々是所謂六条藤氏
桐壺巻の所と成るひじを見るべき
拾遺恋五
もえそめし人ぞ恨のすゑもこゆ
人ぐちもひのすゑむこふとも　顕仲
堀川院百首
かけさらばのどかるべき袋舟の
こぎかくれゆくあけぼのそら
和名鈔云蒲名苑云砌　説岐階砌也

人ふるしてなけきくる人のうきくさけて
こゝろみてなふ思ひ乱れ妹それ人ようつろふ物おもて有
田上ふ待りをふ
そかすを見てとゞめる
我身ふつゝの枝乃ちゝ
思事待りをこゝろよめる
風をいたみ岩うつ波の己れて世をそこや
為静人のすふゆみやつゝと見よそれよめる
かりの宿るを身ふ知ぬ
をこの身たゝ人の男そふいふ

催馬樂石川
いしかはの　こまうどふ　まいとゝ　こまうどの　こまうどの
さゝがにもつゝがなき子ぞ　石川の　我中に
たゞなるやうなるあやうき中にたゞなるやうなる
勝地懐舊云催馬楽ふ古き物ねばいふも
る石川ふ大和国高市郡の石川や河内
の石川ふ妊氏歸ふ河内国諸蕃ふや
うふあれ是らを石川郡ふから也云
子孫と石川のこゝ云ふ
同標注云俊頼朝臣石川やこの哥ふ
催馬ふの須ぶりてつけられ
の後山城の名所ふれこゝ云
ふ本拠より取合られ

新勅撰夏
有明川ふ波そやくみふ浪そ
立つゝもとのうすゞみの袖

前聞白

夫木　ゆく
ありそ海ふ浪ふ
山堪ふ物ふりそ
そをを袖ふ
夫木　の袖
石川やそゝぎの常の中
夕ふれふ行くれんかをえふ
逸ふ井ふそめの吹れよめる
純古今　の後
日ふれ井のそのみなやふ
みるけへ
万代　万葉雑八
夫木雑六同八　万葉雑八
よゝ世川ふ岩のゆやふ

和名鈔云蘇敬本草注云秦皮一名石檀 和名止祢利古乃木 一云太無乃木 葉似檀故以名之
三勝問云とねりこの木といふ木は木の色いと白く其樹の葉に似て大木になる也実は[illegible]の如き形にて上の方は葉のやうにひらくと云々
本草和名云馬莧一名馬歯莧 和名比由
奥儀抄云ひゆの葛飾とは[illegible]其名をもふたてゝやゝ田舎には田つくるものやとひたる人にしるを集て此を[illegible]て養をする其日は肉を[illegible]の稲にて[illegible]
袖中抄云[illegible]
八田舎に稲の[illegible]新しき[illegible]稲を[illegible]神に奉[illegible]
俊頼髄脳我宿の早田刈上て[illegible]此哥の[illegible]
倍の事委しくみえたり
熊代翁云新饗の初斎を甘煮[illegible]
君ら使をかへしやらし[illegible]宿めいかを[illegible]
[illegible]道理ありて[illegible]

とねりこといふ木のしるにすみの[illegible]
ひゆを見て
[illegible]のしるにいるる駒のあしを[illegible]ひしやのくさ
下葉にこえられてかれさかれは
万代
うき事はのちのしるしにのこれかもとひも神のめぐみまさらん
隆源阿闍梨七条坊にすむ[illegible]
たらふいたる事ありてあはさりければ[illegible]
ふかきつけ侍りける
夫木 袖中
こまとめにへの[illegible]あさりも[illegible]あむにも[illegible]くれるし川る
のへし
夫袖

まじはる
同云初斎の新饗の昼食は命して[illegible]く竈處へは人をいれぬ其への時あまりもその奉る処にて外食としてそ進せすつきて侍るかへまさをなり
萬葉集十二巻に住吉之敷津之浦乃名告藻之とも旅寝は實方朝臣の歌にみえたり
新云ほかけは穂掛にて初穂を刈て神にたてまつる日をいふなり 柿山随筆[illegible]石にもほかけのことをいへり
[illegible]への重点の[illegible]なる一本もなし
山家集
宇治川や[illegible]
漢書薛廣徳傳云乞骸骨賜安車駟馬黄金六十斤罷云々懸其安車傳子孫
世説云倘獲懸車致事實欲歌哭於斯
孝經註云七十致仕懸其所仕之車
白虎通云臣七十懸車致仕者云々
懸車示不用也

夫木 袖中
[illegible]のつなりとかけそへていかにかへさん
住吉にて旅の心をよめる
夫木 続詞花
すみよしのきしの浦に旅ねして松の葉をとにめをさましつる
田上にてよめる
[illegible]をかりのあとに[illegible]松の[illegible]
[illegible]してよめる
河のせの[illegible]人にいそぐや
露のこぼれの[illegible]よめる
夫木
澤にむすぶしけの野へを[illegible]あさみどりの[illegible]
七十にあまりて後[illegible]人のもとへ[illegible]
[illegible]

夫木
かゝれは車をかけてよはひぬるよのちにそゆかりもくけら

皇后宮弘徽殿にわたりおはしましける時　夜のふけゆくまに夫比木

かきくのみそなたちわたりくるにかゝしあはれはつけくる人をしらしう

見ておもへは夜やふけぬらむなれ石たゝみ

なきわたつちにおもへるをいさかしたえみるし

待ちしてやまちをすてたる夫木

うくやかよりわれはあらはなたみしられて侍る

めりさにふるとかすてよみける　大貳

かへし

金葉夫木
石たゝみすゝりを庭を見るかさくおもひふせひけるれ小夫

和泉式部集
ちゝ夫
名にしおひて身かさくみつきみゆかしく袖を衣うさきよ

夫木
おもひさる女のことねてゑふとあやむしたを見てよめる

続紀光仁天皇宝亀元年九月吉備朝臣真備上啓乞骸骨云々の詔報ふ曰昨省来表即知告帰聖忌未周懸車何早云々
清輔朝臣尚歯会　季経
いにしへのかけし車はひきすれてわれのみのこるくるしさやる
新葉集雑下　妙光寺左大臣
今はとてかけむとおもふよはひまてつかへてかくはちからなるらし
伊呂波字類抄云甃イシタヽミ
発心集云雨たりの石たゝみの上ふ並へてうちてききてなり
石たゝみは今いふしき石なり
仲文集
ここのへはまさりてこそはひさしかれみちしくつきもひかりかはらし
古今恋四　深養父
恋しとはたか名つけけむことならむしぬとそたゝにいふへかりける

さらぬたにいくそたひこえしはしらかむかへのまつの川のなかれは

田上にて　おもひつゝてる松かけのちとせををまて

くやしくもいひそめてける松かけのしのふを見てよめる

かたらひてもさしやはやさつき松も竹にちとせまきそめのよ

さかりにてもろひの山にすかてよめる

夫木
さつきのふ東宮の床のさとしふらつて猿の声やまなりけり

殿上おりて侍りたるころうちうちよまりけ

なれる人よみかるつゐてによめる

いかにしてふく人ふたりしひとむのこゝろも見えたるみつきうれ

下臈にこえられて叙位のをりふれて侍る

後拾遺雑三　和泉式部
こころやいくへる春のあらたまらむたえすひとりの冬をおもへは
六帖
おなし色の松と竹とはたらちねのおやこひさしきためしなりけり
千載集　堀川
さらぬたに夕さひしき山さとのきりのまかきにをしかなくなり
年々随筆云大臣より下六位まて昇殿ゆるされたるかきりは殿上人なると公卿は公卿と規模とする故五位まてにては殿上人とはいはす四位五位の人々は殿上なりて近侍の臣となれるを規模とする故えかさなる名にいはるゝ百官は大宮の奈浩なるかかくたく小大宮のまへに用るは後の転せるやく古今集の哥にもみえたり
叙位擬位となへりもえて位を得るを叙といひ又擬ともいへり

夫木鈔雑九巻此哥左注に云く此哥ハ世のありさまにつけて思ひかけぬ事のみいてくるをむくいをしらてさりともと思ひをかけてたのみし人を指ていひけれハ思ひなりとゝまりたるよしいへりとそ云々

万葉集に赤乃曽保船とよめるハ赤き緒にて丹塗の舟といへる軽艪にや

隣女晤言云拾遺物名さけかみあしさねかさけかみそくふ人ハこゝろ、ひろやたらぬとはかるへし是を季吟か抄にハ鮭撥口訣にこのみ注せり顕昭の抄にもみえて散木集にもよしといへり云々

数ならぬ我身ハいちのみをなきやなきうらむ人のこゑなれなれハ
ものあはれさそはいつとなくとしかもを見て人のい
ふ、ぬかひなりかるとはかりたれハよめる

夫木
いさやまさみなとのさま見えしてそひさま歌よみける
からのうらといへる事をよめる

夫木
なこの海乃おきへ（おきつ）ゆくさいをけしきにいつなりとのおきはなくしも
障子の絵に海のつらに人ありて見ゆる舟のゆく
をみる所をよめる

夫木
かつしかのまゝのうらまのおきつらしあけのそほ舟かろくおすらし
あまのくちあしとそそのくれぬるやらしとふ

ゐまし（ゐ）てたしさてかきこえし（このかた）しかも

八和名抄に小辛螺七巻食経云小辛螺和名楊氏漢語鈔云蓼螺子とある仁之此哥詞書にやりて思ふに貝なる魚なからみしと云所ある

雅哥百首かせのかしみのたくみの世や

日本紀応神天皇巻曰三十一年秋八月詔群卿曰官船名枯野者伊豆国所貢之船也是朽之不堪用云く初枯野船為塩薪焼之日有餘燼則奇其不焼而献之天皇異以令作琴其音鏗鏘而遠聆云く

日本紀竟宴歌　源光
渡之喚多流不留幾宇喜磯遠須豆年波曽散耶計起比此喜登保玖幾許遊流此哥新勅撰集に作者古事記にハ枯野の事高津宮の際出て書紀とハ少し異也夫木抄此哥の左注に崇神天皇云々とあるハ非也

諸本詞書のみありて歌脱たり今吾野口本によりて補へり

ものうてそひおもふれさひかるを見てよめる
くいせたるにかしみといへる所いからしとてくハさらされ
いともなる

よしとおもふの神もかけにかしみなりとてさらさめや
中宮亮仲実かこしをおもひしくつりてみを
みましハおきなりしてよめる

夫木
こきなるもこゑさやかに出なるくもりや舟のみことなるさ
枯野よなりてたえのかさふてくしからけなりて
うてよみなるよめる

あさくりかこちへさきふたきつせなたえてもまさても出なくてられ

隣女晤言云曉新しく汲る水を井華水といふ事也心にて散木集にかゝる哥も今ハしよ云されし夜更て水に花さくよしといへるにやあかゐの井華なる水たせるもあり

前漢書司馬遷傳云假令僕伏法受誅若九牛亡一毛

たまつくる姫ハたまつくる姫の誤にやきこえし字形や似たり此哥ハ世にいひ傳ふるよしなれと此世に知られきけるの浦波こゆよむそのなをしれるかなしも歌にかてよまれたるなり玉出嶋の事ハ玉勝間今兼名蹟考等にみえたり

人しれすよるにあかゐのみつくみてよにけやらしをこゝろむ

いまはしもあかゐのみつをくみあけて涙も添ふかしかるらむ

権僧正永縁（永縁イ）のもとより牛をかりにつかはしたりけれは

かへり事にかける

嫉しさをきけるかといひてのつれうしこのよもつけにおよはさりける（夫木）

とゝし

いにしへのたまつくる姫（舟イ）のうかはめりしてあるてかはるのわたりの流の

をゝ（四イ）経して殿上おりて侍りけるに法務（通イ）君のもとより

つかしいひおこせて侍りけるにかはしてのよみて

ろ筆をかひもてつかはしける

凡雅集雑下　兵衛
木のもとを昔のかけとたのむかな（ちもイ）涙の雨にぬれやすらむ
後秘抄云近衞みかさの山とは八雲御抄云近衞大將こゝろさし中少將とも
餘代翁云大中將なと三笠山と云是ハ兵衛門なと柏木大舎人助を御綱なと云ト同しきれのかひとしるへき

高砂ハ地名にあらすも高くて山をいへり播磨国の名所とのみ云ふハ訛也

室山入道ハ伊勢人也へし八雲御抄に亀鏡抄なと室山入道十巻としるせたまへり六百番歌合寄海人恋ノ哥の難陳にも室山入道亀鏡集とみえたり〈　〉にや考へし

三笠山さしてきつれと涙の雨にかくれてゆきけるかな（ちもイ）

このへし　家道（通イ）朝臣

みかさ山たちかへりてしそのかみは袖はぬれにもさりそめけれ

田上にまかりけるに法山のかはらに人のあまた侍りて

まのしけるをとふれは山はりとなりて侍りける

とかりとはこそとはまし

山ちこいからかいをもかものとふとこへて高砂の舟（のイ）まつて（かへイ）まつ

伊勢に侍りけるに正月ばかりに斎宮よりさしせ給ひ

ひとつしるてもろ山の入道とくとらりて侍りける

故郷に来ぬる春の夕暮みせひろけはや立かへり春

（夫木）
かへし
思ひこそ身のほかなれみつせ川
みやこのかたにまかりてのぼりけるに
かへる雲をみてよみ侍りける
（こゝろ）
かへる雲こゝろをしらばとゞめまし
ゆくへもしらでなるよ桜を
大殿（師）の帥のこひしくおぼえさせ給ひければ
（夫木）
君ゆゑと神こそいはゝふまでもおもひの数よ身もつもれ
あふひ待りける比、隆源が番にて
（夫木）
ひかげさすとてかけそふる

（夫木）
おもひこそ袖のうら葉の森ならめ
人のかたよりしぐるゝもなし
（夫木）
ゆくへなき袖のうら葉の水さえて
あるかなきかの月ぞすみける
（夫木）
田上の八月許にまかりて侍りけるに
あかつきがたに
（夫木）
ありあけの月をみるにぞ秋の夜の
ながきこゝろをしりはてぬべき
（夫木）
櫻谷の淡海国守太郎が御祓の
名所七瀬の内の真二瀬田下り二
里ばかりにて清水日吉の社ふたつ
ならびたり佐久奈度神社
神名式文徳天皇実録には
佐久奈度神社
熊代翁云式部丞大夫式部丞の叙爵
しるせり

（夫木）
かへし
思ひこそ身のほかなれみつせ川
みやこのかたにまかりてのぼりけるに
かへる雲をみてよみ侍りける
（こゝろ）
かへる雲こゝろをしらばとゞめまし
ゆくへもしらでなるよ桜を
大殿（師）の帥のこひしくおぼえさせ給ひければ
（夫木）
君ゆゑと神こそいはゝふまでもおもひの数よ身もつもれ
あふひ待りける比、隆源が番にて
（夫木）
ひかげさすとてかけそふる

（夫木）
おもひこそ袖のうら葉の森ならめ
人のかたよりしぐるゝもなし
（夫木）
ゆくへなき袖のうら葉の水さえて
あるかなきかの月ぞすみける
（夫木）
田上の八月許にまかりて侍りけるに
あかつきがたに
（夫木）
ありあけの月をみるにぞ秋の夜の
ながきこゝろをしりはてぬべき
（夫木）
櫻谷の淡海国守太郎が御祓の
名所七瀬の内の真二瀬田下り二
里ばかりにて清水日吉の社ふたつ
ならびたり佐久奈度神社
神名式文徳天皇実録には
佐久奈度神社
熊代翁云式部丞大夫式部丞の叙爵
しるせり

萬葉集二十巻
五重之目不醉草跡此手谷見座
而吾止偲哉
日重上人聞書云めさめ一首と云
八巻の事
目うつり一草と云の事とも云
後の事也二万葉集ふるき
らむ集ふるし茅ふかれ
源氏梅枝巻云又ての
の色のひ紙やうふかれ
母を筆ふかせてかれ
見ゝ

和訓栞云目結直垂目結ふ袖かと
物ふるそうう一目二目の縫ふと云
ふ事ふるそうふと四つ合せふると云
結ふ云ふ孔穴の数と目と云

和訓栞云つゝみ藁藉とふ方丈記につゝみをしきて夜の床とすと云り東近の俗束藁を席とする也盛衰記にもうつのつさとふ所以しきそとやり称く事是也
同云称うま猫箍とす倚席は志ゝせうて抱と云り顕昭説にたへいつゝみもうなみとかへにみ同しと云り加茂より奉るる又蹴鞠の御遊にかりに敷物をつるか称くとしてふ今も田舎の躰にハ称くらしといふ条曽路にて大おる従の如きものをねこといへり
冬哥にもふのつゝみとよめる記あり考併すへし
熊代翁云つゝみハ束編にて藁紙つゝみあみたるにて今の疊に奏けむ类と云めるへし それかぬるひろくれんもあるらむ

桜かうふまくしふゆ和やうる那らハ花とあをとハいへいさしかし
水ゐ身のかきよきくされハめうらぬをうんてよめる
捨られてうきよにそむくならにふかくるともみえぬ身かなや
つゝみさい乃古のゐうへおしろ藤てたひえさ給る多しる
あやしけ成るを見て俊成かよめる
けるみのうつよもし旅寐して身つの里よをかねてそのかれ
こよひをきみて知しまうめる
つれなのうへいる津よ雅らむちかひのつよふ志くものつなし
さなる事なくハ京への知らしとおひ多れといつしか
衣このうちにひかれてよめる

玉葉集旅
くやしきよふ君か思ひあて いつもわれのしのふれぬき

結句苦者に桑をとこる 苦者不為駢者の意にや一本のうちふては苦者不離者の義也又うえしハくえの重點をちくさひらかれふても通し

新序云季子脱剣致之徐嗣君嗣君曰先君無命孫不敢受剣于是季子以剣帯徐君墓而去徐人嘉而歌之曰延陵季子兮不忘故脱千金之剣兮帯丘墓

史記云呉季札初使北過徐君徐君好季札剣口弗敢言季札心知之為使上国未献還至徐徐君已死乃解其宝剣繋之徐君冢樹而去従者曰徐君已死尚誰予乎季子曰不然始吾心已許之豈以死倍吾心哉

身なくもなしぬるハたふもぬくいとふみやこの方え赴しき
つましよハ詠ぬるふくくてい本のうちそらなみ
ておる川をさかなあるしのさけふさひられさ
えきうぬ半をうちける
かるめやうちもいうきくむくりわき半ふくかねかみハ
山よあえひあるさらるふあつのひしるさのしられハ
かをうけてゐしるをしのあさけハ袮らあ我身にきをさらめ
つくしよ侍るは肥後ち盛房か叙の身のよさあり
たまひをもちれるあらをさりかれハいろうくろ
そらふ高なるうときんを送てよめる

夫木鈔
あられふりひしをとたゝくと
つかのうへにてたちとまりける

職員令云神祇官伯一人掌神祇祭祀祝部神戸名籍云々
職原鈔云神祇伯一人相當従四位下近代至二三位帯之

新勅撰集にかくし事侍てこもりゐて侍ける雪のあしたに公衡卿のもとへつかはしける ふかき夜の花につけても思ふたきたきゞこりつみてとよみ侍ける
熊代翁云一本の積薪は労をあらはしたる意にて上にいふ上てくれよとなり

花鳥餘情云正月五日の叙位に六位の蔵人ハ巡爵とて従五位下に叙せらるゝ事也

史記秦始皇本紀云二世皇帝三年八月己亥趙高欲為乱恐群臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤邪謂鹿為馬問左右左右或黙或言馬以阿従趙高或言鹿者高因陰中諸言鹿者以法後群臣皆畏高

金葉
あさくらけよかけしらぬもろともをさやつかの身よ忘れそて思る
神祇伯のあきつかすを修理大夫顕季のもとに
ついてまかりけるにのみやましけるをきかむやとや
うちよするはいかやうなりしとおもひけれハやしさ
すゑのなり侍れいまはおもしくていふかひなる
よるはよるへしねられぬ日にはつめてつくりきのあるのつれて
正月五日叙位の事なとおもひつけてよめる
もしとをふ又たれにかえられてうきみそらいの流をそふむ
田上は待たるはむらいの山より太みなみのしけ
ふえたるをふ車とまちつれしくのいひたるをみてよめる

鹿を見て馬といひける人のあるもかなしやそれはさかしき
けるもありけるをかくいひしのたそるをみておもの
けそくるをみてよめる
夫木 万代
筏士よあすか川のみをよくしおしのけられてさはかれ
まくのちよるこそかれてありとはいふとの
のたゝるをとりてよめる
いふをもいつちかけし世の中にけさねもなりてゆかぬもかさ
近江にて詞
あるふもみえて田をなかりてよめる
詞花 後葉
あしひきのやまのもみちハ世のちをあくかれもろくしめゆりかへり
むかひのはふしろくのあそひたるもとなれハ

拾遺集 仲文
かをさしてむまといふ人ありければかもをもをしとおもふなるべし
純宝
おもひいではなしむかしのことやそのかみやおもへはむかしかりける
牡丹花千首
かくいうら男ひけたれし鹿はさして馬といひしむかしくひめらではなし
万代集に田上山にて筏のうきをみてよめる
よみうつ筏士あつ松川の水とあれは近江のあすかの歌のことあすか川八陸奥なれはよみくらすべし一本の松川正しくるべし
斂巻庭訓往来庖丁聞書などに金輪又鐵輪などいふ今世に五徳といふもかなわとかゝれと思ひかけしるしかなわなればかなへとなんよむ

大和本草云馬刀ドブ貝ニ似テ小也泥ミゾニ生ス海ニハナシ色黒キユヱニ烏貝トイフ本草ニモ蚌ニ似テ小也ト云リ其外ミゾ貝ニヨクアリ蚌ト一类ニテ小也
物品識名拾遺云ウツセ貝ハ小螺ニメ遍也まつてをうつせ貝ハ物語書にかひを

けるといふ小冠一湖月抄にかいつくろひ清浄なるをいふと雅言集覧に善悪ともにつけていふともいふともいふ云々

梁元帝保衡巻にめくたくかひをつくるなどいへり今音物清浄なるをかくいひて汚れ穢ある拾遺に信平朝臣をいつくしきかひをつくれりといへり

熊代翁云かひとつつみ折くふ目録をもていふ物の山のかひ小例なるをもてかく新勅撰恋二

我恋はあはでのみやは年をへん玉のをかひも今はたのまじ

枕草紙に云水干事紗ふたて平絹おりても又色白ふても何色もても大納言の時分内に参用之

古今集伊勢物語百人一首等の注ふるくより熊代翁云ひやのあるより穂屋のをを蓋をもて掛ふる一あやをふ文をもて穂屋のやうにするむ

江家次第に遣唐出物二疋并送物とも之北山抄大饗に条々幸出物ふ馬鷹あり名義知ぬ一熊代翁云かみ一ハ種この紙をさして引出物ふやむさゝれて帋ともふ詞ぞあるとも山川氏に名と道ゆゑの例をいむ

みそうひさしてふるもうつりといふをやとてよめる

大来

江のとふふそうひもみるこうたもれてそふ人(そでぬ)しほさ

身のあやまちき事を忍いつけて後ふるまいふよめる

熊代翁云かひとつつみ折くふのみふをやそうむ(こゝ)

我恋はあはでのふらくのみふをやそうむ

枕草紙に云水干事紗ふて平絹おりても又色白ふても何色もても大納言の時分内に参用之

古今集伊勢物語百人一首等の注ふるくより熊代翁云ひやのあるより穂屋のをを蓋をもて掛ふる一あやをふ文をもて穂屋のやうにするむ

江家次第に遣唐出物二疋并送物とも之北山抄大饗に条々幸出物ふ馬鷹あり名義知ぬ一熊代翁云かみ一ハ種この紙をさして引出物ふやむさゝれて帋ともふ詞ぞあるとも山川氏に名と道ゆゑの例をいむ

大来

かり衣やうあるものたちう(うへ)てあけのやい(やえ)紐むすひ結うふ

人のりとふ舟うたうそふかんをむさてとの

ふそうそ作りそれいよめる

妹一そのあ月のみそらまよみちめれいふ(こゝ)ろをあふみ

神代紀ふ白銅鏡とををのかみふ(こゝ)ろ祝詞ふ真経津大御鏡ともある真澄の義ぬり

古今集夏

蓮葉のふ(こゝ)ろふ(こゝ)ろもて遍昭

ふふふふをふとあふふく

千仏経ふ宿世因縁無量寿経ふ皆宿世をいふ

勢陽雑記云岩手里九ふ西へ一里古森の跡あり

大殿の別当は男のふみをもてかくふある

女よみをふ(こゝ)ろ

ふそうそ

同作ふ(こゝ)ろ

てあふふて

世中をそむくふ(こゝ)ろをふのふふうふ多ふふもこうめ

身のあやし(我イ)ふ(こゝ)ろふ行とふく人のふうめきやふ

ふそうそ

おふふそれ

ふそうそ

伊勢ふ作りそふ比祭主親定(宣イ)いそていふもあお

新撰菟集ふ伊勢ふ参王輔親う五
たいなて寺より三昧堂のほら見う
せらるこひてありくとつけ
られて祭主のお代ふ岩手ふ
みて年ふもおふてる

新集集恋一　実数
くらかの色ふ染ふ
いそそそ人とろひてもめる

王子年拾遺記云黄河千年一清聖
人大瑞也又云黄河清而聖人生
四五句ハ光臨の生をとる

千載集　天王寺ふまうて行をふ
長柄ふそこ昔の事ともを
すてよみける

新千載雑下　国夏
いにしへのすゝの松もつの園の
ふかうらせをかのこるう

をもこ花のこ山のさをと思てよおもひろわけ
ありてみるふまてとよおもひろ
ゆまもかそむひの心つくいうかりそろひもれ
てよめる
あそひそ乗ふ人のさうれいよめる
大未
うかれさるふせやそみめ心果ひそかはのそむそこ
天王寺ふ多りそふかこそこの松
とをてよめる
千載
約まを忘ふ出一つの玉のすこみそも名ふおうけり
人のをそれさなの里ふりかるとみてきていみ

和訓栞云音曲ふやらこふ今映
のきく能そやハ雅字とろう説
文ふ楽舞声こうえうう牛始の凡風
もろやーわしひ牛始裏鈴ふこえ
たり鼓吹の意ふ或ハ拍子の音鞋こより」
年ふ随筆云そやーとハ歌ふ数ろ
ありての新歌ふ合楽のきり代そ
やもとてやすめこふそえう
ーもろこそ云

言塵集云つの字ハ詩ふ通新草
のつのあひこまふ詠あひたりて
ふ歌ふこあるも聞のまゝ

昔より多ひまるこいかうこいひこそれ
まそろそれいかいかけふ当てふくみ事神は
名ハ行ろいふ多りかりて跡ろ人のもふ
ふそこひそろをここのあるこそのみ
えそれいかろ人ふ昔ふ恋ふるかこそ
いつこやそれ扇こて秋風ハいろそれ
つの身ふおさろかこそ

熊代翁五句隠にふ懸冥とうけてるわれを懸第といひては詞つきさけれども猶第の方ぞむさしは詞のつきらのようされと此は既く誤るも見ゆれは其類收
続古今恋五
ありさかくとふるえてさかいのいふ見ゆいたやるわるらむ
神中抄云わしづきは芦管之けのつの事也奥儀抄云わしつは芦のよの中にありやうのかうふなてとのえよう弁さ也私云なりのかふ竹もあり竹帛といふ帛は字をいふぬとよあり つとむべきやうなし 云々
後撰集恋三 まもりもさえ侍る男の心かはりにけれはなもありと云ひやるとて
世とともにかたきこゝろのむみにおれはおやむあもりのかろひもなき いまさき
和訓栞云東鑑に結付護緒と有護刀護袋の類也鏡臺にも有まりとかく雅亮抄にも云らら文胸の名有り 肌の名ゆりゆもと云り まもりは袢纏也

ありける年をとりしかゞ人のさりしと男にこゝはかく
まうあひしといひやりつかはしてよめる
風吹はあひくく尾ともふさるるのいふをかくて折るらむ
肥後君の歌をよみてかへりし咲ぬるはや
たつみたりしなつかりしける
夫木
今朝のつとめのみかるせむとさふよしけるにはあらじとおほえて
うち人々ありけるに陳に宿とりせんとみつけゝるを
かゝる物なむをとこをせいて我人寂妬こそまもりは
おかしてかなれと人のやさしれつゝいふ心て
隨求のたちのゝとりにて結ひつけてつかはしける

古今雑上
世中にありやとのいつの国乃おもひの橋と我ぞなりぬる
古今恋四
かれるむ心後といふて友あるのふくもくの都もかゆるれ
十六夜日記残月抄云あらしと云泊の東當の宿の空の有この二つよりかこそさまじふうへしかしむとて音に六ひろ年あれは以みそてよし
今案奥清の説しく永くし残れかよそふあくしとわくと一つてなけるいふおだらず

夫木
疎なるにあるの歌れは捨ていかつる寺にもせいとえと忘れ
ぬしおぼゆむとおもふ人のこゝろをかくしてけりやく
をよめてよめる
君はしはさつりたむつの国のかりの梅をつくりそれ
むかしそのゝかる人をあらへ人は物にまりてつかはしける
夫木
神めしてかけりしとのをかきのふくも人はおもひたるこそ
人のもふあかりけるに扇を忘れて侍りけるを
かへしおくるとて人をかくやあるふみしと書き結
りそるを見てよめる
きやいさいあなるま人とをきれりあやしやまのこゝろひま

大和本草云梅花貝形小サク長立方
許オモテニ文アリ ウラ白
俊秘抄云つと云ハ苞と云也やゝ物
も所の名も所に依てうれハせの国ハ
こもなること云ふるり五月五日小もの家
小あやめふく物ゝつゝみおくそともた
争くおるこの国ハ昔さゝ物のかう
けるくさ有り一ハ共に八安積の沼にハ
やゝ物ゝ小ふるいふ事ども中つへ」
離下長可花ゝみかりみをさゝなこ
もゝて名と久ゝるうらやなー」
山本明清云花ゝみハ云ハ童蒙抄奥儀抄綺語抄
能因哥枕の説よりー本草啓蒙ニ
菰などの文字と花ゝみあてうらいも
ーろー
花ゝみのこと屋代弘賢の説あり

作者部類云左大弁藤原正家式部
大輔家經男

御製の事ハ今式等ハ詳ハみえそう
近くハ祝詞考大祓詞後釋記傳
あゝみハくくそうと考候也

新後拾
夫木 春風ふるやそ(ハ)の梅乃笠貝

夫木 ゝのみるたゝえふもゝ
神中

伝ふこけいの希駈

拾遺集雑恋
あふことをいくよへぬらんわかそのの
岸ふる水もなけれ

本ニ暗ハ下数を立入れ狩ハ借とそ
へくう

あゝ今事ハ今より物を記の事
をハあゝ今ほゝとゝ我ハうち事ゝ

和名抄云唐韻云牧狩漢語抄所以
繋鳥
万葉集ニ司志つゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ夫木
抄ふかちゝあれにゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ恋下
恋草との哥考へ今ゝ
宇都保蔵開巻云ゝ犬のゝ
ぬるとゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
蜻式部日記云ゝ(ハ)ゝ
ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
栄花初花巻云ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
古今著聞集云ゝ夜法師
ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
和名抄云病源論云欬嗽之後肺寒
則成之

こゝろあてにかりそめる人(ハ)かりそめ
きゝふとゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
虎ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
ゝのあやー
つゝとゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
探得船字
夫木 ゝへ
ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
うちゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
いゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ
ゝ(ハ)ゝ(ハ)ゝ

寄夫 奥津舟

あかい抄云みところ〳〵とこゝぬ
らの楽俚ニミルホドノ何キクホドノ何
と云散木集にもかゝる事ハスルホドノ
き也
続詞花戯咲哥　　女房
千はやぶるたゝその神にも多へまて
しらるゝ事のかくれなきかな
和訓栞云ひしり物語のひしりハ名徳の僧をさせり今の世にて上人と称似をとる者の通称となれるもあやし
枕冊子云ひけ物ことの老たる男共
庶人をひろくさやうにひけるはな
男の推つみつる
入江昌喜云推と誣ふにてやしなへ
わろしとする歟
詞花雑人の推をとりて侍れは
おのみをいむしきものと去られは
つみえむこそあるしとも也
雅言集覧云花心とハ心のあるなるを云
俗のウハキ心也
新後撰恋五　　頼舜
もろおもし心のくふあるみよ
あき風さけハちりけり

かくちらで人にしられぬ何ならむおとなき事もなくしかりなき
人のすまぬてあさひなさに酒のみておひのまき　まろうとまさらイ　夫
とるをつみおとして　てイ　あるひとりみあやしき事なれや
くちしはらひ　はらひイ　そしるをやめてよみる
秦　兼夫
きよみきのもりをたれもかけておもひをつみたる人はあらじな　のイ
人めもとふまうりて春もちかくしやなりしてかへりける
まさの日かれよりおくりて侍りける
山ずみのよもの心にむかひちもつきものはかくこらの篠
このへし
おとつむをみんにはその名のあきにあふことやもちかるへき

玉葉集雑三　　順
うらとをき浪と尾上の松風と
ともにさそやいつまでかむ
袖中抄云大和物語云無名抄云今案
俗説に大和物語と云ふたつの物語
いとひ是いふひとつにいへて帰たり
是ハ猶てやよからう尚可付物語説も
はさん捨あさらる後は山とならんさて
山とハ可き也
後拾遺雑　　赤染衛門
まことにやおもひて山の月はみる
よそにしれとよそになりしを
続詞花恋
徒にも松ふさしれと思ふやな
我をもすての山のなるしき

散りし事をもとこそはなれゆくやこゝろにかゝるはなにおひなり
山のたかきこずゑの人のうつりしぬる
散る花しらずとそこての山かくれ　みイ　はもとをるしれとはるかに
ことのつねかるゝ事はよもしらしかとも知る　こけイ
法科は遠く清き山の林ありていひ伝へまかしとほしくいふ林　むけイ
瑞賢かおやかれの流れ　山寺夫　にありて　流のすゑにて夫　飛瀧音清といふ事を
秦
雪ふる時たちまちにかくるをしやといその夜ならひ　リイ
修理大夫行宗が往生要集をかりてかきうつし
をかへすとてもちかくのこゝろもとにはかなく　とイ
そてをぬひてといつかりける

史記刺客傳云荊軻曰願得將軍之首以獻秦王秦王必喜而見臣臣左手把其袖右手揕其匈然則將軍之仇報而燕見陵之愧除矣將軍豈有意乎樊於期偏袒搤捥而進曰此臣之日夜切齒腐心也乃今得聞教遂自剄太子聞之馳往伏屍而哭極哀既已不可奈何乃遂盛樊於期首函封之云々

金葉集　選子内親王
あみた仏と唱ふる声に夜ふけて
西へかたふく月をこそみれ

栄葉抄云第十八願を舟にたとへてよめる哥念仏の声を梶にして生死の海を超へしとの心

受領とハ諸国の守を以国衙荘園の事をとり行ふ者也

樊於期か荊軻にかうへをまかせしハつひにかへさゝりけり

このへし

修理大夫　三宮御製ト云々　野口本十二字諸本无

燕丹か淚をまきとそ於期もえを薤よりも本

式人の堂乃[室イ]」[ナシ金]障子に此絵を天王寺乃西門にて法師

の舟にのりて西をさしてこゝろさしてゆくところかける[金]

をこれは[よりて金][我イ]おかしきかりと堂のまへのいたを[入たのイ]とゝめて」

「已下金ナシ

金葉　阿弥陀仏ととなふる声をかちにてやくるしき海をこきはなるらむ[と釈教][諸イ]

松本江の橋にかけるをとよめる

夫木　さきのよのねかひのはしハつくりおく人のこゝろそわたりなき

かへりきて安居のくらり船よあらひのあとこそよせ

杜子通典云漢有虞公善歌能令梁上塵起

熊代翁云ひとりふくれふのくれふハ齋明紀彌儺度能子之瘦能矩娜利于那倶娜梨于之廬毎倶例尼飫岐底婀度梛弐とあるくれにて同しく用たるへし

摂津国西宮の風祭の絵をよめる也按に一年津の国にものせし西宮より芦屋の里をへて住吉川をわたる道の左右に一町許に求女塚と誌せるありて高き処に松数株生たり稍過て石屋川あり道の左一町はかりに處女墓あり万葉集なる右の小竹田云々の哥を石にゑりて都賀川を渡て少し住ふて西の道の左一町許に求女墓あり里人ハたゝ大つかと云り今按に万葉集九巻代に標将為跡縦将語常慕葉墓中に造置壮士墓此方彼方に造置有故縁聞而云々とよめる如く當時造しを今に残れる也處女墓を中に置て前後の二の求女墓ハ智奴壮士宇奈比壮士の墓なるへし處女墓を求女塚と書るも意に叶へり此哥も其意にてよめるなれハもとよりそのまゝに宜しき也

○散木集

たゝくかけるをとよめる

うらふくる月のこ葉ハちりすきぬ秋もくれぬる本の松ありけ

ねをとよ松の木一本にそなり[てイ]

夫木　あら磯の浜松かえのつれなしとおもふもあれはたえりけるかな

みしのまに神代の松に心さしてゆかしさも

いふかひて風の心のかはるをかけるをとよめる

夫木　志賀の浦のよるへきなみをちかへけ[けイ]ともまちて人の家人[のとくイ]かせぬ

としをへつ

たゝちるをたゝかへさるならひ　紐もかけをとめ人をまちやす

をちの浦よりしかやくかさなれ

たくとは焚物をいひ又は敷物をいふ
とし子ふ同し

続千載　西園寺入道
山姫のたまもやらふちりにくて
ちひろにさらす布引のたき
船寺津国にある前後大江の橋より
和田の岬まてを津国の名所也
新拾遺　茂重
友さそふ室のとまりのあかつきに
声をかけて出る舟人
秋都摩哥にまをそみやけてかゝる
日となりをみつこゝろとかはりて
いまゝ集の万の哥よりおこり

みしけは西風也

浦島子の事は日本紀日本後紀を始め
万葉集水鏡古事談童蒙抄その外
諸書にみえたり浦島子傳また続浦
島子傳といふものもありこれ日本後
紀によりて作れるものなるへし

よさの浦にたくもの網をかけつれは岸うつ波のたちゐ見てなき

布引瀧

続古雑中
山姫のうちの楾にかけてさらす布や瀧のしら糸

ゐみてしに浴みて絶まむ水かけり

夫木
ふるちふのりうちよせよせし衆をかに上てよせ有て
わかのみをきふかあけるとまつまさよりかゝくあり

みしけふふきの身をよふ海をとうけさらめる外をいひ七年
たちまち緒俾通の家ふて浦島かまていふ事をとりそ

夫木
海路を深あけくれうつゝをとひある身のそらゆくもやしとそつる

田上ふ持つしはうちかくはるてとのさむらひてなる

しやうさは凡癖之一云古癖とも書
或は小狭癖ともいふ
梅園日記云こさいつしきは御菜とも
かきむとさらうつしきうちかう
む御菜とあらはゞわはせとよむ（さき）
平他字類抄云菜
あはせと云事は枕冊子空穂物語古
事談続世継著聞集等にもみえたり
熊代翁云別れうちなりしよりては詞つかう
を猟する物へ一ふをとうらに読れあるを
はえもけくさいふ人はつうすてかふかくふ
此胡にの説は語多くれは定かなし」
ゐるくつしは鳥獣を捕る押機也
俗にもおしともちらいひらくちうしも
やう危き物を敷きて殺さむるいり
さうけかくさやそて此のめかくの刈々りの堕
ちておさんたにまくいまへいるもの心
天武天皇紀に機の字をアハナチと
訓り即踏弩の意也和名抄軽猟具に
漢語抄云鼠弩一云鼠弓於之と有る
ものそふみするしめるへき

あやしさはみかりしもえそひつまれてはせのうちにかくれける

河よ胸ある森の木を身ゆれはさいの於かれは心もとなき

独さうて此あらりといふを出て

よふ人のてまるつみを出よまうれうようとよ出そてかきさ

式部大輔のむかひのやのかき日よめるみかへしをと

いふ事をして身をとこら作りたるを人もみぬ那あるふ

かくりたをそふやけかとちりてその於ちかくそさう

あれいさしらてを人のかしるきてかくれよしまと

わかうをとよせてとかさ

田かゐむそうくるうたるかいはゐみをるうしてもかくなくしとき

辨官補任云天仁二年権右中辨従四位上藤原実行正月廿三日任前少納言
若樹云齋宮和名抄以豆岐乃美夜
とよめり伊勢多気郡あり崇神紀
五年以天照大神託豊鍬入姫命祭
於倭笠縫邑とあるこれ齋王の始也
然共伊勢に御鎮坐あり二重仁乃
御代の事にて彼国に齋宮の建たり
一始の齋王倭姫命かり但齋宮
記に自豊鍬入姫命至栗子内親王
凡七十五代御任云々見えたれ豊
鍬入姫より数る事諭かに一続
紀神亀四年に補齋宮寮官人一百
二十人と見えたるあてその誠かり
一事と知一云々

続拾遺恋一　俊成

人をだにあはれとやおもふそのかみの
浜荻忘れ草ならねど

あはれとも思ひ給へ忘れ草
浜荻ならぬ我身なりとも

後撰恋三　定文

昔せしこころのおくをいかにせむ
いくちさとかなほまどふらむ

陸奥の国の名所を読る玉葉集旅の心を
読る

陸奥の特都(シホ)とそへ憂身辺は三渡の
地名をよめり玉葉集旅の心を
国偏行ゆきあひて陸のひくるふみ
さくみ(ママ)しほ(ママ)とそよめるむらむら(ママ)「さ」
勢陽俚諺云三渡小津村松崎の
間に流々川といふ

源氏紅葉賀巻云この女一宮をそ
なほ(ママ)ものおもふこころそそへ
給へる
云々
そこに艶なるをいひて栄の巻に映の
意もあり

伊境ふたりをこの別曲実行公卿勅使ゐて
大神宮へ参向したりそふ齋王ひ
しとり行事辞ゐて侍りそふ寺へ
こもりて日来(ふけ)て参りかへりこりん
御代の事ゐて勅使ゐてりむ時それより
公卿よりて勅使ゐてりむ時それより
余きりとりてのりそふ十年そこり
も参こきし(ママ)ゐて勅使ゐてりむ時それより
なりて勅使ゐてりむ時それより
参れをいふ新ゐて参りむ(ママ)ゐ修(きよ)れけ
参こと云ゐて侍りそふ
ゐられをいひてつこをむとてその

伊勢物語云昔世ゝつけごと
清あるむ男ありけり男ふかひ
出むとて侍ふしけるに女
ことばかりにてかくなむ
くらべこし振分髪も肩すぎぬ
君ならずしてたれかあぐべき
きりてとらせて

六百番歌合
兼宗
さゝ波の立もつゞかぬ
神世より久しかるべき
神垣の風俗
小神と云
坂樹八十玉籤問云三籤者何物乎是坂
榊也尊貴之名也用此坂榊刺立以
為神之体故謂之籤耳云
繙繹云々(見隠の意)
氏哥見隠の意
(雲霞称顕注密勤共外諸言ふ
ゝれの論ありて一定ならず和訓は
深隠の義と云)
言塵集(ゑめつゝ眼路(見やりたる処
三餘叢話(ゑめつゝ目路の義にて目の
かよふ程と遥かなるやうに)
此贈答修理大夫集に長き文詞あれ
しかばとゞめてえ引かず
いせの海荻が葉集より始て後の
集にあまたもりくるをさき海ふ
生る荻と是を難波の芦にまがふ
海荻ともいふ後世の俗説

続古今 神祇
さくら花たをるたもとの
大水 言盛
返し
続古
さくらやいざの海荻風ふけば
殿下にて上陽人のこゝろをよめる
眉ほそく細長にゑがく津をよめる

白氏文集上陽白髪人詩云小頭鞋
履穿衣黄半青黛点眉眉細長
和名鈔云説文云黛(タイ)須美(スミ)畫眉墨也

白氏文集驪宮高詩云墻有衣兮
瓦有松
続古今恋四
ふりみだす心のたけの
ゆくへいかゞ
俊成
高野日記
死ぬれば法もなにもいらぬ身の
後の世までの
続草庵集連哥
古への昔のうひ地ふみそめて
ふかき我身と
拾玉集四
浪風のうき世の波ぶ神ゆるし
ゆるさぬ我身と

新拾遺旅　氏忠
ふるさとにたれまちわびん鈴鹿山せきやのかやの月をみるらむ
和名鈔云伊勢国鈴鹿須々加郡国府
脊藝阿武郡
入江昌喜曰爾雅疏云楊一名蒲生澤中可為箭笴云々是に擬ふ本朝の古に箭笴とせしかやなきと訓せしなりノト十通ふされハやなきを有て柳なり
和訓栞云なくさむなくさとのみならず物思ひをはらして慰労するをいへり秋の詞物語等にもなくさむと云てなくさみといふ例多し「いづみ」月詣集補注云和訓栞にも云ると和泉式部集に花を見て春は心もなくさまん紅葉のちらぬ程のいかにせん若紫巻に明くれのなくさみにも見んやうなと哥文にも多くみえたり

かへし
夫木　布引をこえてかしこしちらしちら山あかさきの風の吹こゑしては
さて山ハ何かさの郡にあり
大貳長実白河にて川を魚夫ととらめ
夫木美題　さらみにやそのちひろにあまりてあふかもきぬのなみをは
伊勢よ待りなる室山入道こもりもの此まとまり
おくりて侍りける
いさめよみしねをりをなくさみてえそうら聞まれたるをれかりしれ
かへし
いへいなにをなるあしとえさえるなれうらなみのなとりぬらし辞

同人のもとより柿つけにそへておくりて侍りける
かくらへむ実ゝかきそのたけさふちよ柿つけとなへさらめやも
返し
めつらしきみしをハ柿つけの末のよかてや袖につきもせし
そのへ日ありたる祢に草のふみつけられてなるを
みてよめる
みちのへにぬみさるうて柿を乳草かくるへ心あきふくなさてもる
前安家の同侍の逆修しける導師中納言
律師たゆくしられハふるふおかに行於ら禱立て布施に
しらふ訣よみて積の志をふいれなやとひひられを

嘤ゝ筆話に隆正云かきをハ垣磐のいゞ累たる合語の格と思ひきたさあ韵きいはれいかきいろとかきをいふもまよはしと云し
和名鈔云陶隠居本草注云白頭公和名於木奈久佐一云奈加久佐篠目集には菊をおきなぐさといひ莫傳抄蔵玉集等にハ松をいへり
御室撰哥合　生蓮
霜さひておきなくさつるおきなれをなよたそりてて行いきらむ
菅家文草云弟子先為外吏平生作念三七五七四十九日善功德事逆修
布施ハ布襯捨施也国語周語に布施とみえたり

俄よとぢめ

秀ふさもみの須みかけてうつるつみのかけやさゆらむ

金葉集の奥よりもむしろあくれ（とおかしくて

かきつけてつかはしける

金葉ふく

あくるよのみねのうすくもうちはれて恨船亟運雑歌百首

夫木

沙弥経貫上

ありあけの月のをかたのあさぼらけよそほのみえてわたるかりがね

夫木

をちの海よそのあけぼのかすみわたりてかへるかりがねのこゑ

おくるゝかりがねやゝもなほとゞまりてなれしかすみにこゑをたぐへつ

熊代翁云五句ハ木の実の熟するが俗そうけうくりやう

白氏文集云高山起微塵。

童蒙抄云山里ハたのまれもせぬものなれどもたのまれぬるハ田のさまにてあるべきにつかうまつるかの故語詞の近道考之ー

ときハ永己庄

夫木抄

我ゆくさきの浦のさよ千ちあくれもまもるくれ

言座集云ゆ、濱けきゝ、詠

いやき濱けき理叶て古歌考云書紀姓氏録ニ留連ツタヨフ云ヽ移意より轉ゞ迷ひ浮事ホ云なり

一遍聖繪詞云巻

いつゝゐるつむみたの浄土よ

住吉社哥合拠河ら述懐の哥の判詞ふ

このうら山の哥をりてこゝろこゝろにうかれたるまゝあり。追風ニ哥廿九葉左注ノ

金葉雑上

をちかたにいつゝこゝろそかゝれくこゝろをゝきてもゆくへしらねハ

字鏡云雖孕始兆也旦浪利乃登支」

初句最晴小被厭をよくうたいかへしてのみよといへるにや
昌尊云流津磯小先出る杭の名なれセ
ありひの誤ゝ

熊代翁云七ヶ和名抄地膚子勢
狼似大蒲而附石生者也魚名鮫法
云石花一三月採紫舒花附石而生
故俗名之ゝあゝ物小今也俗小ハ
セイ〳〵ゝ此哥小さきいつるとハ
石花の意ゆゝしくつゝしてハ
られてよめる氏物の岩小かゝ
ゑゝ如ゝ物ゝとハつゝさて
仮字小ハゝ

拾遺恋五
世中のうきもつらきも名つれて
なびくものとハ人やみるらむ
信武

新千載雑下
椿ゝもゝのもゝ〳〵小ゝぬ
ゐ〳〵き山のかづらもゝ〳〵れ
和訓抄云婦つけ和名抄小釋とよ
め り 逸文拾ゝもゝえゝう字鏡小娘
つけの木とゝゝ伏見の辺小侍
をゝ〳〵魚を集ゝを云紫漬のきと
いふり

源氏蒲巻云おかれゝゝゝ
ゐ〳〵くしのいゝひ木ゝゝゝ

朽木杣　類字名所集小近江甲賀郡
ゝす名所集覚小近江高島郡朽木
谷小あゝ〳〵云り
ゝゝゝゝゝ玉極の栄やゝゝよ
〳〵ゝゝの男ゝゝゝ幸〳〵ゝゝゝ
〳〵頻二万葉小思許里美日為ゝゝゝ
延喜式鎮火祭詞云御心一速比給波
正為ゝ
源氏須磨巻云ゝ〳〵ゝゝゝゝ
ゝゝ世を思ひ悟りてゐゝゝ〳〵ゝ

後拾遺集冬　家経
紅葉ゝゝゝ〳〵れのゝゝ〳〵て
椙のゝ〳〵ゝゝゝゝ
倭名鈔云木皐云寄生一名富生夜止
保波　一云

奥儀抄云籠小入て飼ゝを放ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

景行天皇紀来田見邑　万葉集土杉網山
出雲風土記意宇郡久多美山
松葉集小杉網山景哥仙覚抄雲国ゝ云
名産覚小曽後直入郡ゝいゝ
拾玉集
山里小心ゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゐゝゝゝゝ

新勅撰
何ゝ〳〵ゝ木の杣ゝゝゝを見れ
ゝゝゝゝゝゝゝと我身ゝゝゝ
夫木
ゝゝ川ゝ岩ゝゝ椙のゝ
世の中のうゝけてゝゝゝ
紅葉ゝゝゝゝゝ河面ゝゝ
夫木
姉ゝゝゝゝゝ
世中を恋ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夫木
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

萬葉集十四巻
芝付乃御宇良佐伎奈流根都古具佐安比見受安良婆安礼古非米夜母
名寄
月さゆるよのみぞのかちはり
氷のうへに山をそかむ　隆信
新勅撰春下
わすれめやかはみの神をうつしゝて
きらかりやまらんみかけなし　俊成
萬葉集一巻
河上乃湯岸盤村二草武左受常丹毛冀名常處女煮手　吹黄刀自
風雅集春下
このめてもそよやうれぬきよみさき
ちりし花や波の岸する　顕昭
月清集上
秋かは八もその山の名をそしたる
ちろいまとこひつりけれ
新古今雑中
かけさる身ハ山すしもとせかし
かきせの中にかくなれくも　赤染衛門
新勅撰恋五
人心なのかゝしくはかあれ
河の川も岩かかくり　兼宗

みちのくのいはでしのぶのうきしまに身のたぐひなきこの世や
大木
さみだれは諏訪のみかさもまさりけらしはれぬ世にすむ身ぞ
身のうさをかこちかほなる世をいふにまかせむ
世中のかゝるふしぶしつみはてゝいつかそうらみかけまし
花ゆへに世をわけこの杜ハかくれとつゝ山かもはてしなし
玉葉
たまさかにいふをもいかむ我ぞかならずぬる人しれぬかひは
新後拾
続詞花
うしとおもふかなる神を清くして
立わかれてしらぬのちハあさ我身かな
あふ事のおもひにつき神はまさるとしも世中かなくなるこそ
千載
世の中のあはれはわかりそめ渕ハ浅き瀬とこそなりけれ

菅をかつくと云こし谷問雜秘すあり国珠庵雜記ハ此の苑のあさのこゑあり

和名鈔云陸奥国岩城郡岩城郷諸名所集磐城山を駿河といへり考ふへし
筑前国民部省圖帳云志摩郡柚師浦　出雲魚充内膳司乾魚今案名蹟考柚師浦の考あり夢をかへしいふ事日珠菴雜記にありサーのまいとあやをいふ梅園日記ハ歌ありて引て論り考ふへし
淡路島ハ夫木抄に越後又紀伊といへり阿波と紀伊の名にありといへと於近江也云一恋下我と君とふ哥考へし
続拾遺恋一　教定
うつゝにかゝるたちよあらうぞり
空のうらをかゝるとさや
新千載冬　為定
大淀のうらみてゆく波かしも
こゝまてきてかくすらされ

我とこそいはねの山の峰の雲のかゝらぬ時ぞこころあり
世中をおもひはなれぬいとはすゝしめるそのおはかれるその
ともかくもさてのよハあつらしのそけはくれぬをかなり
たゝの事いかれぬ風のふかれいつる身をかなしさり
続拾遺
わひ人の涙ハ海の浪なれや神師のうらにかくれなさけなき
うれさいまたいふたよりもなかてむらいて世をそむくらん
大木
あはれ身をわするさきの恋いや君あれて世をそむくなる
うき世のかみそなるかなしきのうちを人にみせそや
世中とおもひつけて頼むれハ身ハいつはるとのまてさる
よの中をとうらみてなくもの舟車うちそへてかよひ待く

祝部が君うむ石間川とよみたることいかゝ
ときゝつたへたれども尚其事集小出ざれば
猶川の名おぼつかなし未だ見ざるもの
もゝしきの都の人

千載雑中　公資

年ごとにふる波の川かうしこそ
かゝるうたよみはじめけめ
古今集二巻に所載風俗哥
なれどもいかゞしてか雅の中に
詠ずるやうにてとりいれられ
よられんや神中歌の格もしりがたき
ものなり

職人盡歌合

かくてこそ身のかゝらはへあめ
ふらしもれ
熊代翁云つくり土座ぬるゝ田
舎住居と云さうにこそあれ
土をつきわけて床の如くせるし
言盛集云つくらつくらし
雄略天皇紀曰九年秋七月河内国言
云々伯孫月夜巡於蓬菊条丘誉田陵下
逢野赤駿青伯孫就視而心欲之乃鞭
所乗駑馬前並驟駑馬後而急走
不可復追其乗駿者知伯孫所欲仍偽
換馬相辞云別伯孫得駿喜歓躍而入
厩解鞍秣馬眠之其明旦赤駿復為主
馬伯孫心異之竊竟誉田陵乃見駑
馬在土馬之間取而置所換土馬
たゝ小川の近江あうみ路ぢ八常
滑心万葉集ふうう
万葉集小兵君恋之奈要浦鯛ぐよ
う憂嘆く良さ
万葉集恋草をカ車小七々虱
新古今恋一
かゝる袖ぬ人ぬいはゞくちもる
らんことのいと侘ぬりうう

謙徳公

新千載
寄題

ナイ
なでしこけみ烟よむ山里の
夫木
山松のうら言
いそのやまもゝく年ふる
夫木
のうへ夫
我ゐまつ秋よおもひたまちをいのこと
夫木
世中といてやふたゝ
新千載
寄題
ありれてこ年のこてくさい

万葉集五巻　梧桐日本琴一面
伊可尓安良武日能等伎尓可母許恵之良武比等能比射乃倍和我摩久良可武
万葉集十巻
秋風吹漂蕩白雲者織女之天津領巾鴨
山家集下
ひとりきて我身にまとふかしらかな
まかしとたるさまにそされ
言塵集云せこがいはく鹿を狩に縄をはりて鹿を追ひおまく
勝地吐懐篇にはいふささの哥と載て云
いそささのこぬての浪なれなさむ
右万葉十二にいささ山たちえこえなせ
崎より出たり是る小磯崎を誤りて
おささとよめるは用るに足らす
かすか名所秋部　考合見へし
後撰恋六
あさなさな身をしる雨の恋そえて
るかきこりつむ人はよきかは
古今冬
けさよりは人のよもふりしけるかすみ
こぬれは春まれるさとよ

身をまくてふく人あらいひとに婦てたるのをこえてちかくなし物を
さらの世もさらに世の身代りにうけのさかいてやすからぬかれ
さへらしの空にも守りきるたの身れなや婦る身なりそれ
なりそつるそをされかぬ身になりとは我はなれたる
みちのくの名にかけしせをやそふかは河のかたみよき
いふさなの名み乃湊のうつせ貝をふらねてよせかすむ
何事も思ひなりてぬ世の中にあらためてみるなり
世の中はかくいふ名かさ物をやたのむ身をもいとへとはへ
ちらかる身はなきこらはなるうけさせやさいわりて人とならむ
難波なる芦のかりねのおもひかくる人にも涙くさむ身はのよや

我こそは世にみえて秋山のこずゑもひとにさそはれぬく
此世にはかかりけりともいつむかしあらむとかぬ身にはそれもさそひぬ
東路のよふしにありけるあけぼのにのぼりてよくとなくすなれ
今よりはつねにもしらでおしみてわかさきの我身をなきむ
雨くものたちひぬなりよもの物をやよふねのこゑしつ
よのなかにひたすら笛吹にあらねよとこそらむとは
かきのもとやまの物をしにけりも身をなれまさりなり
やみのよにまよへやらぬさとるとのよれ花ひとにして
かのえさるいつのまの代たけふかみのされむとなむ
くさつむる荒野の杜のそとさよむ後のはつひもふせよ

和名鈔云出羽国最上郡 毛加美 郷

古今集

あめのうもふかむ虫のねもうとく
袖をそぬるるころにもあるかな

源順集云れ舟のおくへもゆきさふらへ
ろかいもうしなくしてれ舟のごとし

新葉集云れ舟ハ全く用ふめるこゝろを人

千載集巻五　季通

かたおもひ袖のうらなくへ
恋のあまのふねをこぐかな

散木奇歌集　巻一

第十

雑部下

長歌

百首歌中述懐をよめる　千載　補百

みよしのゝ山のおくにもすまゝほしおもひすてゝもかくれにしがな

世のなかをそむきはてゝもすまれぬはいかにしてかはおもひすつべき

いかにせむ人のこゝろのうきふしをおもひしらずもなりまさるかな

いかにせむ人のこゝろのうきふしをおもひしらずもなりまさるかな

万葉集四巻ノ吉備酒六巻ノ黄豆醤酒
ま〻醤豆醤酒ノごとし
拾玉集一
ふるさとのあれたるやどのすゝきをも
消ぬしなきの名にやおふらむ
堀川院百首題仲実ノ
いかにせむ人のこゝろのうきふしを
神祇
神ながらうきふしをのみしるべにて
なをたのまれぬ人のこゝろか
又書ハ御ニ出てゐみとよめり雅ノ字ニ
新葉集云いつのけハ一筒
新撰字鏡云鞭ハ乃ち革霍ノ如シ
うちこえてハ智久旨ふうたれけめ人非
人ふゐのうち〳〵
無智文言人非人等字音ノ
又外ノ字ニ
万葉集三巻ノ筆ハ布刈同ノ
同七ノ海藻苅ハ海藻
和名抄ニ海藻
ハニ字一音ニて米よし
ノおひ風ノ世
熊代狛云今按ニ倭倭ハ倭女ノ意ヲ
倭倭ハ人形ニハ非ス其妻ノ
ノ倭倭ハ人形ニハ非ス
おやのうしろめたくおもひけるとぞ
源氏抱木ノ
ま〻同意ニ

夫木　酒夫
あさいそふさのみづ〳〵いそ〳〵それこひてなめ〳〵き
ねのうらハイ
ねのうら川せきりよむそでの
水のほの消ぬべき身をいふ甲斐
人なもの　浦のかもめとあれやふきつれものいふ方ぞなき
神祇
そうけふようひそむうらめきてかうらなてよを恨むる
夫木　ヤ我夫
ものゝ海をうらのけ〳〵てみやこむ
夫木　ヲイ　ヲイ
いそうけ浜のやみもて〳〵
佐藻古曽蚩無智文言荷生計和布人非人庭可成畢等哉

神中抄云くもゐのあやとは雲鶴の文の綾也百詠注云有雲鶴綾也云々
拾遺恋四
つの国のいくたの池のいくたびかつらき心を我にみすらむ
元真集
うたゝねにたのむかひなきいせのあまの
無名抄云ぬけの入道殿に俊頼朝臣さふらひける日鏡のかけにみゆる哥
つらねけるにかみてはらふ成て哥
世中はうき身にそへるかけなれや此哥をとり
たし出たるなれは俊頼たるなりけり
おもひすつれとはなれさりける
新後撰　心圓
世をいとふ山のおくにもはなれぬや
我身にそへる心なるらむ
よゝにしぬ　夫木抄云八雲御抄色葉
集俊秘抄等云嵐とは秋風を云
堀川院百首　顕仲
よそにのみ嵐はふかせてしらくもの
いつかくらへをかたにもなし
神中抄云あらしの山は齋院のおはしませる
本院の側にありける小川或人云太秦より
法輪へわたる所にある小河を云と云々

あやしきを世のまとゐにまてもさらにたえはみえてくりかへしつゝ下に
うけられぬをおもひつけてもつの国のいくたのいくたひ
あかのつくゑくりかへしかもかへし身をうらむらん
反歌
金葉　古来風体
千載　奏題
世中はうき身にそへるかけなれやおもひすつれとはなれさりけり
中納言国信の坊城の堂にて人々長歌よみけるに
向泉述懐といふ事をよめる
大木
ところせくしけき心の泉をもむすひあけつゝ志水をとられぬあたる井と
なかれすむあかつきをもたえぬなかれをわすれはあはれとかへ川よりは
思ひなし枕のうへのかみもころもをおもひめくる

志つ冬部　行路雪の哥の所に源氏物語
抄に奥山のあらしの音に袖ぬれてや
そひの外にゆれぬこと八四条大納言哥
枕に木にゆかる音のあつると云とあ
りまりの志すれ何法あるへし
続拾遺雑下　基良
かるみにそ八合にかへるのまつさと
そらやくもなくしてみる
職貝令云木工寮頭一人掌営構木
作及採材事
和名抄云木工寮古多久美乃豆加佐
俊頼朝臣しめ木工頭なれこたくみ
と云ことかへる
和訓栞云のとまる鷹の詞に言塵
集に主にふむさてもいつり又そ
まにたなとも云へる退羽聲のこと
あそし金葉集にのとうつなしろ
のたゝれ名ふへるにもとさ志もさてくる
しつかもなとれいかつくらん
万葉にもふしよへり
打綱山をくちみ山といへり後の謡之
おもきとつけるは峽にひらける
ありへし

むかしにはこゝろありけれはくもゐにかくれしてもかみなりしは
志らさきのやとの志川まとひやあまれまとひつゝいかにもこえはて
なかれゆくかはおくるれてうきたちゐるとおもひこゝろおもひけの
あさ衣ぬきすてゝきえぬけは今又さらにむかしのこし
ふ木こゝろしるしなきやそれをつくさふ心にかゝりてかかなか
なきさなる人なみしふたちゐつゝかけさみるにもこゝろなゆみ
志らすやたまさかなるむあしたむなしいかにたくみはつきさらしも
のきつまをしろのたちれそうてすれもなかりの中の木
おもかけ神をくちみやまかひなき身とは知からからくにふる
身の世にいくらわかてさひしきくもなくなりにかはし

新後拾遺　巻四　通具

古今秋上　　忠岑

山里はかなしかりけり人目をもとをつゝ
鹿の鳴く音に

和名抄云伯雅云栖謂之棲和名須美賀
云度孫炎云門戸之栖也
万葉云かたをかに栖つ雀と出でいらき戸の
玉篇云栖宿也
かたをかを栖とだにも定めぬ旅のすまゐかな
今案名義考云庁前名曰伺候之処
なほ此地ぞ其村里の傍ある岡山をいふ
りこゝをも名おほせるなり

新勅撰抄云終句敬予集に我をうやまふもあり是は我を称めたるなれ
ばおもふぬるてふ意にて

山里はかなしかりけるものをまして人目かれ
我をつゝむと思ふにてもしるべし

あるが故にてやと云ふにたがはず

秋

刑部卿敦頼長の八条亭にて人々あつまりて長秋の
心をよめる

新勅

山里はあれまくしかば秋の水さやかにこそも
らめとをくる

声勅

さけやをたむる寺門雨と共ふ

勅

かく思ひまさるかのつゝもちふるうち我袖のぬるとをかみて

勅

つけてうつくさもむ勿れ

勅

妙心をおもふつけてや勿れ久よ我まさ人のうれをとゞめむ

返事

後拾遺　　増基

そのゝちいつとひくらし侍りけるに

古今集打聞云旋頭歌字音ふせどうかよむ

古今集打聞云旋頭歌字音ふせどうかよむ
ふせどうかとも訓也

ゆく水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

玉葉集雑一　　赤染衛門

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

作者部類云兵庫頭源仲正　三河守
頼綱男

旋頭歌は五七七五七七と心例なるを五七五七七と後世一転もさ
ると三五五七七とちがふこのうたえ一の哥も始めの三続千載集ふ
後成卿隆信の賛あり此調べ

新勅

いくかりおきつゝそのうれの初雪をこゝろつくしむ

旋頭歌

中納言通俊

山里ていとゞ物思ふ夕ぐれをとはせてもなれぬ人ぞ恋しき

新勅

つれづれとこもれる宿のうちながめ始めて幾日へぬらん

百そのの宇中よ安きの心をとゞめて

新千　夫木

あをやぎのうれ末よつれなくもあるかな

堀百

前下総守仲正

千載

春日野のやの草をりけるに男のもとにつかはしける

前下総守
仲正

玉勝間云古今集真字序に混本といふ歌の體をあげられたるは思ひまどはれたり本は混の字とおぼしきを旋頭歌の又の名なりといふ説ある然るを古今の序に別に躰あるにはあらず別の一体と心えて云る也又ハ長歌短哥と旋頭混本と四字の對にせむが為に旋頭と混本とを分られしにや混本ハ別の躰にはあらずそれを別の躰と心えたるは古今集の序ちよくおほえのま書ざまに其哥とて載たる一つ二つありとそれハかの古今集の序によりて作りたるなり其余ハ外にすぐれたるものにてもさらにあらず混本の哥いかにすべきにもあらぬ也

八雲御抄云混本三十一字詠闕終一句所以名混本未詳矣

八雲御抄云折句毎句上物名を一文字づゝおきたるなり

うしろを上とはつまりたるを句の上におきて鹿と萩とをよせたる也このえい延枝也

千載

かきたえしまゝのつき橋ふみみれハへたてたる霞もはれてむかへるかことし

混本歌

さゝひのなとよせてぬる

いろもとおもふ人ハあさ河わたるふちなれても

あふせよせてもぬる

妹かみしうらみよせておもひくらす頃まくらハ

折句歌

中なる仲実ゆをふみしかりまつりけつい

てふくるの枝にむすひつけてつかはしける

新拾遺

うらむらハさてやきみのこころのうちはしらさりけれハ

新拾 藤原仲実朝臣

うらみしきのちにこそへたてかへりふしつきまくらにみる

かへしうしふかくして

沓冠折句詩

さるつましま待つれハきみかすゑ

経信卿仲実のおなむちに返りくる歌

新勅

さかりなるはなの小山のくもゐにまさるもみちはのよしやいまそしる

まちわひぬなかきよすからあまのかはよそにのみきくさくらはな

みやまとところのみをわすれしとおもひきやいさ

ゐちしてまくらしもうらしかなしみ

しハ千すぢハ五字をおきてよめる

八雲御抄云折句沓冠是ハ毎句上下に文字をおけるなり

くれとたつねてみしや

栄花物語月宴巻云此比中宮にも廣幡の御息所そあやしう心ことにおかしうおはしましける或時上の御返し歌にわたり給ふ内にまかでたまひし程にさうらひたまふとほしほしあそのゆへにいかでとおもひたまへてさせたまひとりてあそはしつるをはかりかたきにて

みなひとこそあそばしつれどひろはたのみやす所ひとりぞかへしをまゐらせたまへりし

とわかりはしきよからしう

奥儀抄云隠題歌古式ニ不載事也但古今並ニ拾遺集ニ物名部と云ハこれなりや近代の人是を称隠題ニ件歌ハ為題ノ物の名を哥のおもてにかくして他の心をよめる也

続後拾遺　又性

風さむみからころもきのみわたるにかたちきえて波のみかさそふなり

言塵集云すゝきハおひ傾き野ニ松くくり袋冊子云拾遺抄ニ哥五百八十六首

花山院勅撰云々

熊代翁云さうしとて鮮しき物ニシツヰセウ試ふにハ繍居為魚ぬウキセン又為憂為のきを音便ニイーとひ但拾遺ハシフの仮字ニ入声なから法師とホウシと書如くハフの入声をめくらしたる例なきてセムの仮俗言の如くいひてさうしさきをかへてせむと思ひまかされと仮字かくしけ此ハなくて誤多かれハかく筆をたゝらむか知へしとす

新拾遺集頼政哥ニおちたきつ氷をゝきいふよりまさらむとあるも桐火桶とかく也南史范述曽傳ニ白桐木火籠あり即チ桐火桶也

なそし物からく〳〵と見えぬる人のこゝろく

つくるとてつりしたるを部

小倉山みねちりおてゆく月をあかさりあそ八分かりけるも

隠題

柳

続後拾遺　夫木　言塵

あの浦やなきさにたてる松か枝を波のうつ日にたよれる　志つえハ続

拾遺抄

志ら波にしらいせりこそおひつる志ほからかるはさ乃つゆ

桐火桶

あるかきり月をはけにあかくそつるむらくもあきまたのちみゝえ

櫨下枝云ちされハ漢名ハ菫々菜也紫花地丁とも云り其国説救荒本草秘傳花鏡なとに出たるそて皇国のとみれなる事明らかなりと云々

姓氏録云藤原朝臣出自津速魂命三世孫天児屋根命也二十三世孫内大臣大織冠中臣連鎌子天命開別天皇八年賜藤原氏

続古今神祇　後京極摂政

咲あれやまちの山代松のしたからからたるふの花波

拾遺集物名　さもつけ

栽てみるまふまてるぬ花の名をわれもつけむ年のあやしさ

和漢三才図会云繍線菊俗云之毛豆介按繍線菊高一二尺葉似蒲萄葉而小五月開砕花状似胡蘿蔔而淡赤色可愛又有白花者云々

下野志云下毛草都賀郡日光山又ハ那須野其外処々の野原に多くあり上代當国に始て生る故に下毛草とハ云なるへし

新続古今

すみれ

ちらふむとあたられなかたな人のちるぬ山ちまりをとくるそむ

卯花

示つすたようのたねしらハあれ花となるこそハおとらさりける

樗

おもひくみあふちさりさそてらみすつ名おおなむことおもへハ

菖蒲

こゝみくさしぬちをしぬハかゝる山いつみの松なからさしめや

さもつけ

うしみてなみなかハさむ花みなけさしもつけぬんそはさきそ

萬葉集十二巻
山科ノ強田ノ山馬ハ雌在歩者乗汝者不得
雅言集覧云ヘハ押意ナル花ヲ（オス）
ーーもちゐ俗のおし花ーてなくふ
和訓栞云押ヒヒしハ万葉ヒてみ
ヒーと姫押とする是）俗語ヒおさ也
古今著聞集云長居とーるる事
ーをえつ
（望月牧ノ信濃国ノ
熊代翁云ちつくハ乳着ノ子ノ駒の意
ノ子ー紫日記ノ御ちつけハ橘の三位云
とあるし同意
本居内遠云ちくバの印板ノて木ぬや
とをつけるを云形木の意）今の世の
摺紙のもやいをつくりて紺屋の
形紙のおく紙にもちゐ初ノ板よ
をつて書物の板行の如くもつけ
也ちくバ唐紙の意ぞかもやう有
紙ノ事唐土ノ人ノ持ていてるふ習
ーちくバ云ふ事ハ常ノちくバ
物ハかり何につけてから衣ノから猫ノ
の如ーさて昔のからかみのちくバ
今の行成紙ノ如物ニの余波なり白粉
の色紙張文庫の表張ぬる男ノ物ノ
千代紙ノ如錦繪ちくバ又近世の一轉也
云く

かくこそや
千載
ちつくの名を尋ぬとかくらやちつくの里ぞ
をみ初ー
後葉
ちつくをみ初ノ事ーもちて秋のこひを時のうみやをむ
をちつくをみ初ノ古ハ
ちつくをみてそあやーくをちつきの名のかひまやるて
かくもをみても思ふ
きくのうつろ
をられたる初ノ花をきくのかをかくゆらむ
かくこみのうつろ
千載
ちくこもふるをとけてたのあらむをみのかくさーー

桔梗古今集ふくさちかくのそれ
元良親王集ふくさちかくの花と
こそよめり阿波加保岡止支阿利乃奈布
伎加志山名をおきて桃卅寸の外物語
ゆみ句ふくさちかくのそれ
菜名ふくさ花ゆゑよりの事ハ
ーー

拾遺集秋
好忠
折ふしと云事ハ枝ノ事ー
ありけるよりふくさちかくのそれ
和名鈔云兎名苑云絡緯一名促織
和名波太乃虫鳴聲如急織機故以名之
於里米
くさちかくのそれハ手ノ花ノ假名
なるべし

純後拾遺
ねよみかきの仲ーこのそれ
なきーー
ありあけの月の
そらのそれ
ちくさにおもふ
そらのそれ
新勅
こころ未だ
そらのそれ
まよひたちぬる
そらのそれ
そらをもうすきものとや
そらをもむ
そらをたのめて
そらのそれ

後拾遺集ニカヅケテ云ヘルナリ
活板中納言ト知ラルル人ニテ
カヅケタル一部ノ山林ノ脱塵法苑ト題シ
服玩ヲ云ヘル雑歌ヲ抄シ國ミえたり下学集ニ服息ヲ非身机ヤウノ
古今著聞集ニ後頼朝臣秋ノ夜ニ
田上ノ山ノ庵ヨリ稲ヲ
カケツラネタル法師ノ稲ヲ云ヒツル又ノ
ナホ〳〵コノ法師ヲ云ヘルナリ
法師ノ心ヲ
宇都宮藤原君巻云々
古事談云雑色黒器ヲ以テ
ヲ持来ヲ云
亮ノ冊子云々
炊ノ笑ヲ我ヲ備国ヲ云ヘリ雑
炊ヲ笑ヲ云ヘルナリ
和名抄云蚌蛤
和名波久理小辛螺仁ナ
花蹄子舞鳥賊加
後拾遺秋上
神ヲ祭ル
和名抄云蚌蛤
和名波久理小辛螺仁ナ
花蹄子舞鳥賊加
擣飯カ
散水松葉流
後拾遺秋上
良暹
神ヲ祭ル
袋冊子云住吉神主国基良暹カ哥
ヲ雑メ云ヘリテト云詞ヤアルト云ヘ

良暹云ヤシロ衣ヲ云ヘリテニシテ如何解
事也紅ニフリテヲ云ヘリソレヲ
書誤也云ヽ良選暫案メ又云
ヽ云ノ筆ヨリヲ云ヘル歟
待ル是モフリヲ誤歟ト云国基
開口ス

熊野翁云車ノ簟ノ透ヨリ外ヲ見ノ
姫振タル哥ハ尼乗溢ヲ
古今集春下
ソノヽ井ヲ山ヲ云ヘリ
和名抄云駿馬俗云布知無萬
智之集
杉ノ
千年ノ板ヲ云ヘルヤ

和名抄云赤食経云胡桃味甘温
食之有油毒美和名久流美

新勅古今
我神ハ
ミヤシロ
こゝろみにこゝろうつしてかりものの
いつみの社のすゐしめ
みつ川
いふしてんこゝろ
つゝみの
哦いつゝの
くみのかけ

和名鈔云辨色立成云獨樂 古未都玖利
有孔者也
和訓栞云獨樂をこまといふ高麗より出くる日本紀に高麗の軍兵樂といふ樂とあるに訓せり和名抄に高つくりと訓せり宇治拾遺にこまつくりと云り

獨樂のこと
つくりあらそ
ふ岡の萩
み花をうつ
して分つ

和名抄云細布弖筒 岐奴乃太倍 和名布
壁塵嚢鈔云輔ト弓射時臂ニ
ツク物之ヲ世ニテキヌノカタヘト云ハ是ヲ用ウル云々
御倉山城名勝志云北郡部小出セリ名所集覧云訓郡圓明寺村ノ上ニ
ありといへり
秋部山みちさかへの山紅葉教部ら
ふれてわけゆきの名なりと考へ
和名鈔云馬琉食経云村子 上音甘和名
同鈔云通俗文云隔子 俗云かた竹障也之

後葉
おほのくみのからくにのみ名やまに花をてる波をたつ心かな
統詞 （の後河）

さかりつ

ちとせふる名にかりつる心地をそさてをふをゝ
万まさのやまて

千載
みくらやなまきの原たてをむ民いとをつゝもちてそふ
からかうし

ちとせふてつゝかうし あけおろすかとふ我屋の栄ふそとつれ

そのみつ

そのかみの神ふさつゝひとつもみんなおろすふれ（かやて）

ろさりかけ

和名鈔云連枝昔八千韻百韻ともつゝらの事ハ一只上句ばかりにて下句をそれいひけつれいふるをいふ今の世のうふさまの中此ものの事ハ賦物をも中此ものの方葉書ハ尽ねーたると家持卿付之 佐保河之水手塞上而殖之甲斐 家持卿苅流早飯者狗奈流倍之皇連玖根深也
連普の事ハ菟玖波集新撰菟玖波集筑波問答竹林抄なと考へ

和名鈔云辨色立成云未賦散度久
同鈔云本草云椋葉 無久乃波
神名式云山城国木嶋坐天照御魂神社名神大月次新嘗
木嶋八山城国葛野郡廣隆寺の東ふあり釈日本紀続日本紀三代実録拾遺集逍仙窟跋南方紀傳等ふ御社のうへえへり
八雲御抄云連枝昔八千韻百韻ともつゝらの事ハ一只上句ばかりにて下句をそれいひけつれいふるをいふ今の世のうふさまの中此ものの事ハ賦物をも中此ものの方葉書ハ尽ねーたると家持卿付之 佐保河之水手塞上而殖之甲斐 家持卿苅流早飯者狗奈流倍之皇連玖根深也
連普の事ハ菟玖波集新撰菟玖波集筑波問答竹林抄なと考へ

新撰字鏡云悄平憂貞伊支止呂志
又祈太之

和名鈔云兼名苑注云巧婦 和名太久美止里

新撰字鏡云悄平憂貞伊支止呂志
又祈太之

和名鈔膠漆具云辨色立成云未賦散度久
同鈔云本草云椋葉 無久乃波
神名式云山城国木嶋坐天照御魂
神社名神大月次新嘗
木嶋八山城国葛野郡廣隆寺の東ふあり釈日本紀続日本紀三代実録拾遺集逍仙窟跋南方紀傳等ふ御社のうへえへり

おほのくみのからくにのみ名やまに花をてる波をたつ心かな
統詞 （の後河）

さかりつ

ちとせふる名にかりつる心地をそさてをふをゝ
万まさのやまて

千載
みくらやなまきの原たてをむ民いとをつゝもちてそふ
からかうし

ちとせふてつゝかうし あけおろすかとふ我屋の栄ふそとつれ

そのみつ

そのかみの神ふさつゝひとつもみんなおろすふれ（かやて）

ろさりかけ

おほつれあ
そのみつ
さみそまく
ふさりの寸

おほつれあ
そのみつ
さみそまく
ふさりの寸

しめさ松
くさむく

しめさ松
くさむく

続千載
後葉
うちもめくくさむく成よくむーの歌ーまろ打まて
こゝーなせこやしろ

新勅撰
あうこ
かい
よにこの壱のうちのやちよこの京ふ多こを治ふみしむ

連歌
殿下中将
さてあそ

新勅撰
あうこ
かい
よにこの壱のうちのやちよこの京ふ多こを治ふみしむ

連歌
殿下中将
さてあそ

和名鈔云布衣袴 世間云褐衣 如利岐反
謂衣則袴可知之
神中抄云無名抄云納言 私云法性寺入道殿也
かりそめふしのうたゝ寝 後重

うらぜふくころふしうりくれ
我せこと男をこそ男はいてそもむ
とくく難一かゝり男は女を我せこと
云女は男と我せこそやこそ夫は女をとも
と云女は男をつまと云へさふや
続詞花集 法性寺入道前太政大臣の雪は
ふるとをよめるうりくれ 源後重
かり衣のうたゝ寝はいつもなれ
うらをふくかぜ雪にうりくれ

熊野詣云水底ハ皆其所ヲ知ルヘシ

かきくらしいくのたゝ寝おもつゝ
こゝろをくだくつけおせたるやうまの事とて後は
人のうらうれふることもそつけもなく
ありしにもあらぬ人なれば
堀川院御時うちのかきいたるを見て
肥後君
みをそてこそまもりうれし
うたゝねにかきこしめして清涼殿にめされて
まゐりたるに
つけと仰ことをそれにつまれをくり
かみよゆるしてみれとまゝ

作者部 類云中務少輔藤原重基近
江守有佐男
本朝文粋巻十四紀在昌諷誦文云
仍ち七箇之精舎却九乳之梵鐘云〻

延喜齋宮式云田居殿 御座装束之
類給二主神司一中臣
出居ハ表むさの一間とも伊勢物語ハ
そぬもでるもへりくんでみよ云〻
空穂蔵開巻云鯉ハいさたゝやりぬ
ものゝねをもり 庖丁のわざむさとやつし
庖丁のまゝ荘子ハ庖丁為文恵君一
解牛云〻へり庖丁刀を置てより

首楞厳経ハ六根功徳ハへり眼根
八百耳根千二百鼻根八百舌根千
二百身根八百意根千二百ハ

作者部 類云長濱律師 宗経男

殿ゆふてくらふあそ

さくのつゝちれこ

ゆきを

さうむ川ろ

紙少守公俊ら家ハ中納ら基綱きこさ

ありさまそわこせ給とゆたらんをもとゝ

ろハゐらふいてゐてこひつゝせらふ事を

いつものつゝらうを見て長濱律師

諺草云料理音言植沖傳に出たる字なり意は今俗に食物を割烹する事を料理と称して料理人といふ居家必用に蒟蒻を製するを以て料理するとあり総じて料理の事にしも氏詞あるにや
類聚国史高橋氏文などにも料理の字あり

禁秘御抄云上御局 号弘徽殿御局是御行アル所也女御更衣可参上
和名鈔云弘徽殿在清涼殿北

徒然草云黒戸は小松の帝位につかせ給ひて昔たゞ人におはしましし時まさなき事せさせ給ひしを忘れ給はで常にいとなませ給ひける間なり御薪にすゝけたれば黒戸といふとぞ

さいのみちにはうちやり大夫申しける
松のはゝかきのむくひみてまつをきるとおもひたれ
ごろかしと思へはみよしのゝさけとおもひしと思ふ
みまくのもしけるまつのなきん
堀河院弘徽殿にわたりておはしませたまひたる
よるとことに笛ぬきのこゑしたるを聞しめして
御製
よるとこそよるとのかくにまかりけり
中納言殿にさしひてつかはしけるにきこえ
られたるはくちにおほせてつまけるなる

職事補任云左中弁従四位上源重資康和二七十七補蔵人頭長治三十二廿七任参議轉左大弁

清瀧は愛宕山の麓なり

三代実録云元慶八年九月令近江丹波両国各造高瀬舟三艘送神泉苑云々
和名鈔云釋名云艇小而深者曰艇字亦作艇今案和名太加世世俗用高瀬舟

狐坂山城国愛宕郡松崎の西

むかしのしろぬしかきしるしける
中納言重資蔵人頭にて侍りける時殿上の
人々あまたぐしておほゐ井にまかりて舟にのりてさよ
なかをしける舟中にてのかりてあそひけるにこひけるしく
て渡りしてくりたるに　隆源阿闍梨
ときはにはかむさせんなところかれ
清く
かみなみやとるまてくもりけれ
小山のかみにまかりたるに人々しと申しけ
まとりんとうりたるふさくをさしいふ所にてのかりて

沙石集云故鎌倉右大将家ノ狩時狐野ニ走リケルヲ手ノ付ケテ召ケル狐ノ口ヨリ血ヲ流シテ提原村ヲ仰ケヘ見ケル夜ハ

白氏文集八駿図穆王八駿大馬駒後人寫之寫為図背如龍ノ頭如象骨竦筋高肌肉壮日行万里速如飛穆王獨乘何所之ム

そしらせていそきまいるとて 中宮亮仲實

そらふきそふきそふきかへせ

つく

そらとぶくもをしるへにて

本立助敦隆

しらくもの八重たちへたるおくやまの外よやせよとく

いそとらん

おもひおこせてくれしふみをもちつゝ

ひねもすにこゝろもとなくまちくらしつる

敦隆

能代翁云菓子ノ事 柿濱栗 牡蛎

の名あり見ざるこゝろにそれよりも寄あり鳥と目ふ見たるふ兎鵜鷺あり

ろくろく鳥を獣ふくりかへし

○故木集

塵添埃嚢鈔云南都七大寺云く

東大寺 興福寺 元興寺

大安寺 薬師寺 西大寺

法隆寺

拾芥抄云東大寺聖武天皇神亀五年始造之

中宮亮仲實朝臣備中の任なくらうる時よ彼前の

國ふあをさのくひとゝいふものゝ共をゝ勝手をく

ふとてさゝやかなるいふをとみうちをし

たりける六波羅別當と云侍のやうなる

そらとみつゝいうをゝ仲實えつけて奈ふ多りてきてかうり

そをふつけそ

こゝみしかきそなりもこゝろこゝろ

昔七大寺とふみよ故帥大納言ふ所ふかゝりまし

たりそふ東大寺の寺務律師ふ房よりふもと

雅言集覧云房又坊ハ僧の居所をいふ坊主ハいへのあるじといふか如く坊のあるじ也

和名鈔云本朝式云主殿寮燈臺
日中行事ニ内の切燈臺にうつしてともす大殿油也

帝王編年記云山階寺ハ大織冠於山背国宇治郡山階村陶原家建立号山階寺

元亨釈書云鞍馬寺者大中大夫藤伊勢人之所創也云々
和名抄云楊氏漢語抄云澡盥多良比
俗用手洗二字
たらひハ手洗ふて足阿の約多之足をあらふ器をたらひといひ手をあらふ器をてたらひといふ後の訛也

たらひをりなるに房主のむすめにて今宵 私
欲食さすとひてむごやなれはよあせしあひて薄をゝ
ろさせけるにさりけりたらい取りまとてかりけりなきは
さゝきけるを見て　備中守政長朝臣
こりたいの水はうれしとも見ゆるかなれ
僧都つけまし人はなけれは
やめしぬてゝはきても座すしれ
うちぬ(ちすィ)は自ありたりける法師の房にてあしの
きもかはをとりたるもこそたらひをもてさらりなるを
見て房主の僧にいひける

たらひしてあしをいくらもあらへさ
僧のつまさりなれは之りてやらる
これのあしりいふうらぬとのみは
きさ沢股乃ゑはありておそひてふさきをとみれ
つしれたるをとてィ
たさほしめちをみきゝよそみかへし
平大進基綱
まくらきゝよみちそあるし
たゝめのきさえしの男をしらふおてかくとさて
肥後君

和名鈔云因果経云善恵仙人披鹿皮執氷瓶和名美加
熊代翁云月草ふて摺たる藍染をボウシといふ　三河伊豫の国なとふてハ月草をたゝちふボウシバナといへり　萩月草といひて萩なりの帽子ふいひかけたる
物品識名云ボウシグサアヲバナ鴨跖草

新撰字鏡云撞柄ハ橋梁之左右之柱　乎止古柱

そめこそのこそいふ例の辞のこそかいあ〳〵人の名つけていふこそ之金葉集かも多ひら源氏も右近の君そ又小ものこそ大和物語小西こそ宇治拾遺小地蔵こそ俊册子小波こそ九代実録小最古曽〳〵打多り源氏の筏よこそといふ官女を放ひて云詞と之りかれこそといふ鈴女こそ男女の名ふりかれ〳〵て男注小かく〳〵いふ〳〵之

和名鈔云釈名云横流岐 和名多 在摂旁下帝也

同鈔云唐韻云梁 和名宇 都波利 棟梁也 論語云山梁雌雉時哉〳〵 下学集云山梁雑異名也

雲州往来云只今或人所持来山梁味何以知之

三在此の山のこれそうかく〳〵こ弟えこそ〳〵のこそもたつとおもふ

和名鈔云崔禹錫食経云海月一名水母 和名久良介 貌似月在海中故以名之

文木抄 仲正

我恋ひ海の月とそすむらん〳〵くけのかなかあしよりやと

阿良布をあらうとしるへいくもれと是ハ俗言の多ふ鷗鵡ハ水にうかふと云ていけすの句下の活用代字まてをハ思ひぬもめれいふき雑ハあ〳〵こ

金葉冬

法印光清

ふくかふあきてかうらさをしの
おもひこそつねならぬ秋の
光清ハ石清水別当時り幸清ハ後也

元清考へ

宇都保祭使巻云〳〵きつつ
のつゝんて狭衣ハ川の上ふつゝり
なをうつりのかくいふり東鑑ハ
釣殿御遊もそうり

金葉 頼算法師 雑和

あ〳〵うこみれそくろさゝうの松

と 舎人

の水ハ浅くそとて金

うこふ多のをそるとて修のしうり

と 舎人

のそふ海の月をやとして

慈雲房

ハ イ

と 舎人

人もつけきりくれハのちよまて

金葉よみ人しらす 雑和

もこゐハそみのひろさのみそらよまてありたりそること

人〳〵あまそやそこのみそらよまてありたりそること

そ〳〵又の日別当法印元清ノ堂の池のつら放ち人〳〵

みあそひそるふ元清連歌つゝ半ハ心えそる

こそ〳〵おもひたゝ今連ケつゝあそやおもひやう

ふかそのめくそやそうう 後重

つゝ放のそさよいをやをねさゝむ

元清

元清ハそうよあんへくれそもえつけてやみう〳〵

事外とへてこそうとふこそろみ〳〵て

禁秘御抄云清涼殿条云年中行事障子向北戸立之春ハ東方也二人ノ路程ヲ置テ立ツ
御遊営記云百敷ニ云ク画年中公事被書也絹繪會縁敷錦ニあり然レハ弓昇ハ清涼殿の南殿上ニ至ル迄立ハ二ツくるま障子ニて画ニあり其年中の公事を画せらるゝ
雲客ハ朝廷の侍臣をいふ殿上人ハ雲客ニも称す四位五位中少将侍従等いづれも昇殿をゆるされたる公卿を月ニ比ス殿上人と雲ふよそへていふ
このゝこゝいふ殿上の事ハ殿上の南ニあり人彼殿の西ニ並り是ハ分る事を聴さるゝと昇殿ニ又則殿上人又殿上の次の方と下侍ニ云之

禁秘御抄云下侍三間有廂廂四面敷畳号侍臣乱遊所也如折松於此所也或又酒宴等於此所行之清華大臣以下近代不著之

砂石集云尼公二人大津ヨリ京ニ道ニ逢ニ車ノ輪ノ一アルヲ見テ一人カ云ク一ノ車ハ大乗誹謗ノモノニヨリ片輪ノ有トイフ今ニ人カ云ク大乗誹謗セヌ者也片輪ノナキトイフ

作者部類云刑部少輔藤原忠清
左衛門佐清綱男

こゝこの重點の歌ともいふらんこゝろまふ車とをきり

作者部類云源雅光 右大臣顕房公男
新撰字鏡云龜比乎

○散木集

うつそみのかけそとみえて
堀河院御時年中行事ハ御障子のそとふおいて
まてあそひ侍ける也ちかきよりみやつかへ人の殿上をみて物ゆかしくおもひ侍ける也
雲のうへ人のかけをみぬ
彼殿上人のかけをみぬ
ーもさふらひなさけ

修理大夫顕季あそんの家なる車の輪のうせたるをみて

忠法入道

かくとだにいふへき事ハ後の世の
輪のうせたるにぞありける

こゝろ
こゝろもいさ
月のあるかなきかの
ありあけの

治部大輔雅光

月かけをみよとてやとる人もなくて
うき連歌をつくるとてやとる人のゆ

和訓栞云ゑえ 歌にゑえあるゑえめきとは映字のきし案ノ字とよむに通せり 鮹魚を云は速くなれは名とせるなるし字鏡に鮐をよみ和名抄は鮑とよめり
新云いつけしなはええいつ鉋をいひけしあらんされと飩はええの假字なてかなしらんへ
無二集云壷亀二年 鞍馬毘沙門出現
和名鈔云説文云襪字亦作韈 和名之太久頭 足衣也
之太久都をしたうつと云は音便也 頓阿の哥にもしたうつ皮とよめり
拾芥抄云廣隆寺東寺ノ末 太秦又号蜂岡寺
催馬楽雞鳴
こうは旅させてもかけらくらくしきれ
枕冊子云日あれてらくしさされにさそこしたる人と立まかりて云々
拾芥抄云弓場殿 校書殿南 殿上前 清涼殿

なまいは
いつかあしろにそ住ふかるへき
ある女房のもとへまかりむとてかの人の女房に
したうつをかりけれは一日ふつまさにまかりしなれは
たかしなにかせにわりもとかちを立て
あきれはきよう川まてにやれりけり
いはたかしきつる人にかわりしほかの女房になりて
くせされにきてゆるはさくつき
堀川院御時女房そ殿上におそくたをろひしよ
源中納言

和訓栞云まとゐ 神楽哥にまとゐ圓居とあり 梁塵抄に遊事之と云り 俗に車坐に居と云是也
圓居に的射をかけたるは假字なくえり
万葉集に貧窮問答歌あり 月令に賜貧窮振乏絶といへり 皇氏云 長無ヲ曰貧 窮無ヲ曰乏絶
熊代翁云三句は随求菩薩のまたありしよりは後字にかるなし
人はいなくつけは女に堕落せしまま […] 後拾遺集に […] 僧の堕著を […]

なきれは女みそのうてまかせり
といつけしとせむわかとられたまへは
番にあまりてまゐる人く
人のさいくはことのをたさせなりけるくしき
おし後ちうてはなる
貧窮はさいくそしきさいくれ
いしきれはなりなるとさかして
般若もさうりてせかむとの秋や
法橋なりなる人のこの比人はいたく事をなるを
嘆かれて
隆源阿闍梨

此一句諸本ニ孔脱たゝひとり野口本ふの字存ゝとゝ浦ゝ

十訓抄 著聞集 類聚法師絵のけをみえたり 義一いかゝ〳〵のけしむれとみひけ法の格もかくよみそ法花ふるき

翻譯名義集云楞伽云剎那、時不住名為剎那、
倶舎云壮士一彈指頃六十五剎那
西域記云時極短者、謂剎那

海こそふやのうかねよりおちふる

法橋ちうえ 業一

むへこそ好けれ乃至

（あゝ）
（西山の）
よし乃山の寒き岩根のかたちくれ

ふかきつけちうえ

たそのいろくさ

こゝろをやてをまこと

谷川のんかふかき

身よるく 平大進基保

身のうきへ剎那なるやをやそや

須臾八少間之新須よしく

和名鈔云磐和名宇知奈良之
かきまゆ
かきまゆ
例多一

和名鈔云本草云黄椒和名以多知波之加美一云保曽木

○散木集

須臾もたゝろかくもむそう

田上よ作りそこ乃日の雲ふいし山のそう

稲の葉のそよ風ふれくちをひな

いしや母のこゝろ

こゝろを連てまゝ

たそうちかまたくかそう

かそよいそうそ

隆源阿闍梨

和名鈔云四声字苑云梗概梓木也
漢語抄云梓須三毛知乃木
伊勢集云梓弓もちのごとくしてやりなどいふ
枕草帋云木は梓なもちの木いとおほくきなるものなりいとのいとうつくしきなどもちひさきなどうつくしきなどいふ

和名鈔云説文云楸和名比佐岐也
同鈔云本草云水松和名比流

作者部類云藤原隆成　大宮大進
成保男
拾遺集雑下　おほ井川をまかりてよりてふひのつきよりけれ
恵芳法師
世をそむきやまものいほりしてすみ侍りけるに
大井川のひさしからぬよをおもふかな

市女笠　女の心空穂藤衣君着ふらむ
ちはやぶる市女のかぶり六百番歌合
立ちよらば子市めきたりとや見む
のあめふりければよめる　小野小町
云市女笠つくさうぞくの笠をもいふ口物

作者部類云藤原時房　上野成經男

つく
祈するもの木よこゝろしてきけ
備中守政孝公家の家にて人〻あまたひけるに泉をうつくしくつくりなしてつくもあそばしさりけるや
云蕃大夫隆成
いつみのもりは見えもせの郡
はく
のそけくもこりのそ
いちょいちろきをそ　時房

桃冊子云せもの共ところ〴〵のまち毎日の市女笠

古今著聞集
ちはやぶるかみのめぐみのゆたかなるまちにぞ人はすみける
曽童集云ちはやぶるかみの筆なり造る馬
さうり共胡瓜を作る牛〻云〻
馬と千牧の馬ふるせ胡瓜牛を大黄の牛ふるせ云〻秀句　今世聖霊会の荘或祭礼に牛馬と造りて手向る是らのごとし或は故実今信濃常陸越後の国にて葵て小さ馬を作りて七夕の向ふ事あるよし
茅巻の馬胡瓜の牛ふるせ七夕小屋向なるものやおほ牛ふるせ七夕小屋あれ〻同七月なれはなり
霊棚小手向ふ事あるよし
歌詞考云胡瓜の牛ふ魂祭の具なり云〻
熊代翁云西瓜の皮共燈籠等ふるの箇所も同一歩〻

いちろきをそ
きるうちを
うつふものみ（ミイ）
をそのちき馬
承源法師
ちきる馬ふしからさるさ
つくりのうしふ
茅の中
伴なもの

古事記ニ御火燒之老人續御歌以歌曰云〻と見え書紀にも續王歌之末とこそあり万葉集八巻ニ尼作頭句而大伴家持所誂尼續末句と见り三書ともに續とあれハ都具と渦きを後世ハ附ノ字を出て都久と清ていへりかれこの事つけよりしも清ていふさえ前後につくとあるも伊かうかふにあり（經家ノ詞）熊代翁云下ノ句ハ暫し宿ニ居附てあまりしと末付よりしらう然るたるれらむ

和漢三才圖會云 炭斗 須美止利 挵炭斗多用瓢或蒲筍竹籠任所好

てふちかみといふ人のしる
（まらうやイ）こゝろしや連哥をしてハおもせね
右中弁の安はりてつけよと申しける
（いイ）一えしもやふたつを（そイ）よつり（もイ）
たみにのたみかきとて　経仲
すみにみたみもられてかする（きイ）この郎
清く
あかこきれぬあをけのつらり
よしもさしぬ事をこへハえきかねよしかしと嘆て
肥後君

綺語抄ニ云昔あさおしかうし殿の男殿原の南面にて掃除なとせしに思ひかけず女の簾を風の吹上たりけるにつき女の昇をとひてまたるをとりてくしけるをうりかくなさしるて思ひもかけずひかりて有ける人きれをめし昇をとみわりきゝけれとも其ちうふうちかりてせうふるり

續後拾遺集　外記廳結政の座に古き文の柱に今に殘れるをまゐりてよめるついてにこそよめる　中原師光
いにしへのかしこの都ふきやそしらこのかさねし移のこるまれ

和訓栞云かれし　江次第ニ結政所をよみなりかく成の義なるへし　延喜式ニ於辨官結政所捺印とみる除目なとの數通の文を一つに束ねて結固むるをかくいふとぞ

結政の事ハ筆根條外記政始ノ条拾芥抄兵範記等に詳なるをもみよ小梨をかくかしとふ堅梨の義く漢名棠梨也

錦所談云結政トハ大辨以下參集メ庶事ヲ受付又ハ省以下ノ申文等ノ政ニ預ルキコトヲ以前ニ先カタネナストニ云義ナリ結政所ハ外記ノ正廳ノ南ニ在テ西宮記ニ所謂南舍コレナリ

難儀をハかゝるも人みいそぬこの郎
清く
せうつみふしてよそしもく世ハ
人のこと去うりうさくさめの中ふかりのまけ
まかいとのかさまかうちそれハしる
宰の事かうならしもそそおし（こかるイ）とのる
仲実朝臣
清く
みかうのところまかうむしとは
太政大臣殿のこの家に新院の東家まつ

蕪盛集
つねにさもおくて年もかさつもるにつれてくちおちぬ
新撰字鏡云朽老衰也
和名鈔曲調類云胡徳楽
催馬楽酒ヲ飲
さけとさそうてたべそうてたべしこそんなやまいてるなよかひてまうてるなんぢたりやうんぢたりちうら
和名鈔云職員令云主殿署美古乃
美夜乃止乃毛里乃豆加佐
和名鈔云本草云蝙蝠一名伏翼和加波保里
熊代翁云徹書紀ニかくの如く長ハその法名の一字ヲ以て如来ハ法師ヲかくの如くいふめり
起世経云利益安楽
文選曹冏六代論云委天下之重ヲ於凡夫之手
廣雅云凡輕也今人鄙人為凡夫輕賤之称也
作者部奏云津守国基　従五位下
忠康男

きえぬおりしもふりそふるこの大夫公實の家にて
あさぢふるをのへのさとをとふ人もなくてまきをこりつつ
參議為房
さらさらのこそらくもみゆるかな
彼の大夫のつまをとりてまかりてのちに
たづねきてまかりかへるみちにて
堀河院の時殿上の歌合に庭雪といふことを
よみ侍りけるに
前大納言懐季
降積る雪をいとひて
かくばかりのどけき春の日影をも
長如来とやみるらむ
陰陽頭賀茂在憲
世の末にそらやくもりて
消ぬべき
天下の乱れ出来べきにや
津守国基
多くの男共をたのみふるまひて
川九
多くをたのみてそらけふるまひおほせたるかな

和名鈔云唐韻云耙作田具也辨色立成云馬耙字麻久波一云馬歯

土佐日記云七日九日六川一ふ舟うちたてこきのぼる川の水ひてかやみうらうら一舟のみかくるこゝち

神代紀云船艫此云浮那倍倍万葉集云船舳乎友云布那倍閑尓
新撰字鏡云艫舟前舳也尸和名鈔云兼名苑注云船前頭謂之舳漢語抄云舟頭制水處也和語云閑

同鈔云四聲字苑云底下部出氣也漢語抄云放屁和名倍比流
今物語云内うちにいたくこらへ大きなるをこゝろやりにとかくしてひりいだされたるこそいとくるしけれ行たりともふとゝろひりてえやもいねられ

紫式部日記おなじのむらひめぐりまつ枕冊子ふたゝびあふさかの關ちかくなりぬるをしるしるむ我をとゞめたてまつれるこゝろ人のふ

うしふ馬くをかけうつ
刑部卿のしもあみと津の國なる
しらなみをうちてもてこゝうくる
かそうふ毎をこゝろいれてうつ
てゐるくめくとをみてもてゝめくる
かそうふ神もしものこゝろなし
刑部卿のしもあみとつけてもてこゝうくる
しかのうらをこゝろいれてうつ
大原のたそかれ時のしもあみと津の國なる
しらなみをうちてもてこゝうくる

承源法師

和名鈔云周礼注云節 和名之 度美 覆 障光者也
和漢三才圖會云節和名之度美今云日傘

和名鈔云唐韻云傀儡子和名久久豆 樂人之所手也
朝野群載傀儡子記云男則皆使弓馬以狩猟為事或跡襲剣弄七丸或呑木刀閧挑云爰刀石為金銭化三寸木為鳥獣女則為越智嶋妓折腰弄鞠蹋鼓婦朱傳粉唱歌淫樂云」
定頼卿集云八幡にまいりてよの本ふるまひくるくるとまひいでゝ
作者部類云雅樂頭藤原家綱 甲斐守章経男
和名鈔云楊氏漢語抄云遊行女児 宇加礼女一云阿曽比
六百番歌合寄傀儡恋 季経
くゝつ女のくゝつにてあらく旅やくゝつをみつゝくゝつにも恋もするかな

大原よもそ一みそうそ妙一よもそ
川丸
庭いらんをんなくゝつ
ぬ一みよくつ一さむくつ一さむとてこさりくるは
さくさまおいせてうくせむこそよけれ
つくりたりくるふこさりくるふ家ふ迫
そてやこさりくるふ純ふ

家綱

くゝつ絵ふうかまそやこさりくるぬか

春夢草　百合

あだふかく色もむつまじさやまとことのはのそやふみこりる
堀河院百首作者肥後守百合花
恩之也
千草の根さまざまに云くさ〴〵もさんだん
云て秋の末花色の花咲て那由多く
葉ハ笹の似たりさまざまんだん〳〵。
悦目抄
さんだん花安らむさまざまの
深むこ葉たちさまざまを

聲曲类纂云偶偏の戯いとすくなり
あり故木集にもとゝえられたりといふ歟さ
まふふ紛らはし
和名鈔云黄名苑云螳哦一名螗蜋
和名以保無之利
新撰樂記云螳蜱舞之頸筋
愚聞記云尾張守孝定の琵琶体
弾せし時螳蜋鳥帽子の角て数
刻舞ふこと有しとかや
夏文雑記云牛馬の事と螳螂と云尺
素往来に螳螂牛足とあるは瘦馬と云
事也
大追物出法師落書小酔狂の条に小
笠懸の的を螳螂ひきよせてと有は瘦
馬也
瘦馬をたゝらくといひ痩牛をふる
りくひ〳〵

和名鈔云本草云蚯蚓和名以奈
似蛇蚓而色小蒼在田野間者也
狭衣云いとうちは拍子うち蚕ふしの
めおけてくひちらひさゝてそよゝ
ひく云〳〵
玉緒繰分云勾萬ハ皆截断言て受る例
心敬ふ溝と落ちくゝ久たる如き奇
之〳〵ハ写誤ふと〳〵作者の意より
始る丸禁止辞の萬ハ作用言の限りの
自新截断ふこ言と受ふ定りふこ

人こあアたゝ
むさゝのうし
ゝさりしいい
かゝそゝいまゝ
つ九

いかこゑひてみそ
くちのゝやの御堂供奉ふ殿上人院ふまゐる

みやこ野のさんきうの
川く
さ郷のさのいぬせう
皇后宮亮敦
さうれい
やうあれこうもゆりをえつけきりこのそうう

和名鈔云楊氏漢語抄云高麗醬美同鈔云四声字苑云醬豆醢也下学集云法論味噌南都法論時用之故云尓但世俗所言也塩尻云法論味噌（南都の製）與福寺維摩會十月法論日ゝゝ講師等小水の名ある座を退くまでゝゝとして黒豆設ゝ食ふ故ふ法論味噌の名ありしやう

職人尽哥合十八番ほうろくやう

夏ながらかゝるかまどにくべくれて
くゝるの秋のほのほろ〳〵と

熊谷公羽云下句ハ設醤ふるまひて闘壮ゝ云るもじむ論議者ゝゝ云ゝもあらんやうにてつけゝりゝ云意ゝ

和名鈔云尓雅注云醢　和名太久乃加無奈久乃加生也

作者部类云近江掾橘成元永保元年十月六日叙爵

かうしと人をかうをさそひいへるとて

つけゝる

さそひくたるいをかうしさふ

ゆえゝ秘い

御湯をみそひしかうる僧の論湯（ユノ）ゝゝ

のちよさうてつけゝる

たうをかうしと人へいへるも

ある雨よおそひくるたうめまをしゝを

橘成元

竹子を食料よりゝ附たるものゝ

なるむかたうゝ故ゝ竹子を食料の時ハ奉ゝ之竹并菜也同意也

拾芥鈔云四條宮四條南西洞院東廊義公家公任大納言家繁昌立所也

作者部类云前中宮甲斐　皇后宮大進季孝女

職原鈔参考云出納一切政務ゝ時致雑ゝ取次之職也故曰出納禁秘鈔云出納ニ是蔵人方一切奉行也出納非官名蔵人所ニ出テレヲ司ゝ之ゝ傳ゝ于其家ゝ之ゝ

十月ゝうて女房達ゝ

ゝ御前のしもゝ

おかうゝふるゝ

ゝくゝ

しゝるゝやとゝ

城河院法

甲斐（君イ）ゝ

職原抄大全云小舎人六人近代十二人撰東白張狩衣立烏帽子平殿上人之出ル納御倉等下雑ニ召仕也

万葉集ニ愚人ニたとふる人ことわり物語ぬみふれ〳〵申ニつゐて仏白癡ニ

金葉集恋下
ねうし〳〵やゝ人のかうしをあけくれ〳〵のあらんや
埃嚢抄云腹黒ク心キタナキトヨム

ものとみくらのさくふこゝろを
（持イ）添中納言國信
つけとをめしありそれ
仲實朝臣
たりくれい
ありつゝよまれてもらふ卿
川く
腹くろしとゝ名をえてそれも

公事根源云内侍所御供ハ毎月小供せらる〳〵寛平年中ニ始ル式内侍所ト申ハ三種神器の其ニ今ノ内侍所ニあかめ奉られて女官守護ス故ニかの一日の小供ハ毎月ニ参ル

和名鈔云鍼灸經云月水不通則灸氣穴在陰陵泉下三寸ト

職原鈔参考云蔵人者近習職也如武家小姓也

職原鈔云外記恒例臨時ノ公事除目叙位等幸奉行之官也

和名鈔云野王按補和名保之以比乾飯也
新撰字鏡云餱保志比

堀河院御時内侍所へ従五位上ニ叙せらるゝ日未タ内侍ニ成ラ不ル程ニ小出ノ女房ニ申ケル

まだれにおもひおとさるゝ身なれどめしてぞ帰るおもひしるとき

内侍ニ成テ後ノ内ニ出ヅル程

つけとをめしありそれと
外記にわたるひのまうけ
つゝまよりふるひのまうけ

新撰字鏡云萌山女也阿介比伊呂波
字類抄云山女俗用之
下學集云通草又云山女
淮南子漢注物味苦甘無毒焼煮充粮
和名抄云崔禹錫食經云解酔和名土用漿俗用酢名一字
梅園日記云やらむいやかしの誤歟ニ
解多く焼てくらひ一盃呑れと老父と
茶見もそまつかけてよみけり
一本やらふいやらふいふて野老の音ふや
海老どうのおきなと云る例あり
山城名勝志云常磐村在並岡西

有俊

すゝろゆきかりひそつゝもせぬ
人のとうをたゝ
山女とみて　仲實
なみれいの女
津久
野の筋をやらむとおもふよ
西山よ西京の令婦といふことひきのそふ人〳〵
あまくそしてたそ〳〵とみちふてこそとを

春日祭視詞云常石尓堅石尓福閇
奉利云、
福閇ハ佐喜波閇ともよむへし乞ハくこ
ふさいそひとよまれたる音便ゝ

住吉物語ふねひやしもあまく舟ふ
つゝてゝいふ撰集抄ふ旅人の住果の
船を乞海女のありさまなといふ

あそひとは其のあそひの歌舞管絃
の宴樂のまゝ下ゆるあそひハ遊女
をいふ

さきさまのそ
ゆきをねいつ
刑部卿政
みちもそまりさいそひたまふれ
伏見の山さ出てあそひするとあるのおくれ
なりてをあそるとかりてゐやそひそをイ
六郎孝清

あそひをそもねあそひの舟
人〳〵つけとありそれ
きこえて夫もう

山城名勝志乙訓郡部高畠条云諸陵式高畠陵入乙訓郡高畠墓在菟野郡此所在両郡界故今訓世村西高畠ト云所アリ

くらゐハ四田ノ

翠書類従二百五十四巻奥書

右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了

深見篤慶 校訂

右散木奇歌集全部十巻四冊俊頼朝臣家集也或称散木寄歌或云散木奇歌並非也此古鈔本題散木奇歌甚佳也奇歌與散木相照且中世有須天宇多之辭亦可以證矣僧契沖嘗云宜作奇歌達人之慧眼可服也此古鈔本掖齋狩谷先生帳中之物今影照新寫以蔵于家惜乎此本缺巻九以下雑部故以一古鈔本繕寫補入此藍本亦係先生之蔵嗚呼先生徳崇學富儲書亦称焉保孝生平浴於先生之徳澤有年於茲子孫其勿忘諸

天保二年八月廿四日夜況齋岡本保孝識於歳計草堂

初音

卯月の雪の降かとうたがひ
してうつもれし例もあるひこのうきの来て人
訪ふをも雪と見過せる山里の
出る事は見馴ぬ鳥なれば
年ふる程も雪ふる神代の風情
久方の空の鶯出よ机辺
梅の花見てこゝ、後頼朝臣の歌集おこせかしこう
ふまきあるにたゞちにまゐ書いれ
ひとりもこゝ、の朝臣は中むつ

古今集
さくら花ちるかひさまがふそらはなみの山のうちよりぞ白き　貫之

続古今
これ竹のよの数ふるとしつきはうきふしごとにおひにけるかな　土御門院

続拾遺
いふかひなく秋のうれ風ふかれいたのもれうく身ぶしもぞうき　少将内侍

世諺問答云ふこともありてもちひ鏡ふむふ事いふかひなや物ごとや　若人両財を争ふもの訴訟の事をよろひらひらひめり　国司ふよひ宝うるひに心もちひ近江の宝切のもちひと用へし

散木弁謌集脱漏歌

村上忠順補

堀川百首
新後拾遺春下
櫻
さくら花をる時はみな時の山のふもとより波ぞたちまさりける（たちまさイ）

堀川百首
続古今雑下
竹
ふる雪をおもひわすれぬ竹のみぞ山家のつまとなりける

堀川百首
木かくれの類題雑三
元日
木かくれの松のみどりぞ山里も春よりかねてしるしなりける

永久四年百首
夫木春一
春日
ふりつもる雪をもちひのもとにしてかすがの野べをやきかけぬらん

神社啓蒙云稲荷社者在山城国紀伊郡去京城東南一里許所祭之神三座下社大山祇中社倉稲魂上社上祖神云々

萬葉三　垂麻呂
百不足八十隅坂尓手向為者過去人尓盖相牟鴨

夫木抄　俊頼
初せ川岸のいはねの白つゝしきしれ人いさそうするる

南渕山大和国高市郡稲渕村にあり

稲荷詣

永久百首
かまわらひやとふは春もたちかへれなをさへはかけくさらめし

躑躅

永久百首
いなりやま（山イ）おすゝんのかれいなりはすゝし此枝のをられけりやは

残鴬

永久百首　夫木春六
百たらぬやそくみ坂のたむけしてすきし人いまふ（ふイ）たゝひゝも

蛙

永久百首
ふるさとは吹とふしてなく鴬のまみ（をイ）後えたまらしの春

夏衣

永久百首　夫木春五
はしもあれみなかき山ほ胡かけはかはつのなかかすりゆくかり

萬葉十
足玉母手珠毛由良尓織旗乎公之御衣尓縫将堪可聞

永久百首　大進
つなみをこのはなせにそまるの麻のこころみたされ

永久百首ふハ暁立を秋とせそ

永久百首　夫木夏三
夏衣天（珠）のみそのあやおりやうらなきころもさへそたちぬる

扇

永久百首
かせふかぬはちすのはちそあふきなるあをひ（をイ）かきのへき

夏糒

永久百首
夜の程におきゐる旅を立ちかけてあかふかはすみちせらる（於）

暁立

永久百首
夕立はよそにさるる梓弓いは（入日）をさへかくれかみ山の端

暁月

永久百首
有明の月はまた信しなみせんや稲妻思ひさうりい

稲妻

永久百首
月もうまの刻ばかりの山の端に稲妻ひかれてたちまち雨ふる

永久百首
草香
いくさのみやつこむいのそらにて石河をこえて

永久百首
佛名
かつまつるわさをきけよ小栗をむろくうつむせおかして

永久百首
寝覚恋
あさみやまさてそれいあるかー美野そうか独ひつる

永久百首
出湯
みくまのよりまゆこそ舟のひろをらむかくて舟ー

夫木雑八
原

一二旬幾程野飼好之一住さまもすえられる限一本の
方形ーこさのうふかみよ
ゆ八假名たり
筆根陰云御佛名十九日
今ふすり廿日明三ケ日ふり
うつは綿の事あり永皆のふさ
ふりをへてらのこれ北ふ内侍の
簾下とひてうをかけて出た
蔵人御導師の肩ふかつる也
江家次第云被綿五位蔵人出
自殿上ー北行就内侍簾下取
綿二管令持立自戌北一門先
到礼盤下被導師ー肩次到衆僧
座後次第被之畢
熊野巡覚記云此哥の意ら簡
な及いさきに掉とるふたり
ていて那智の方ふある二川の
湯るくや是ハ海辺ー舟の
掉とれい也書写の誤ら有へき
歟尋ー本宮湯のさ万所ーの
体ら古跡ふえ入れい本宮の條ふ
記ーぬ

寄居歌談
云鈴木高綱
いくよふふむ
里のまてうふ
舟人の汐ま
わたをはつ
くらいふ
うあるらい
てかくふん
と年頃ち
夫木集ふから
人去ふの汐
をはつ
てうくふ
ありこれや
うおんへ
ふいとを

和訓栞云さいうさ左右左ふり拝舞奉幣ふいふり祇王ふ安倉の官人の四位ふようふ申歌也とそえふり

永久百首
煎昌
うめをやふふの神ふりたる
ふろー舟ふ時つふりふり

元帝後宮人既多不得常見乃使画工毛延寿図其形一按図召幸宮人皆賂画工多者十万少者不減五万王嬙字昭君自恃其負猶不与及匈奴入朝選宮人配之昭君以図当行入辞光彩動人顧動左右天子重信外国悔恨不及窮究其事一毛延寿竟弃市籍二其資財一

永久百首
かすみなひくみをの春の時雨ーて京ふ神ふおろろー行ふる
類雑一

永久百首
故郷
たろやとこそふとかふ
類雑一

永久百首
賀
夫木雑十八
かふこそ年ふ椎のもりえよ
類雑七

永久百首
唐人
かふ人いたかの宇ふ舟出ーてそふの沖ふ時つふりふり
類雑七
夫木雑十七

永久百首
王昭君
見えそやれみにいそうも
類雑七
夫木二十二

極楽往生ふ
ふといふ事ー

阿弥陀経云七重羅網七重行樹

基有

花もこもえわくいろ〳〵にほひうつり七そのあみをかゝやくうへなく
元永元年十月内大臣家歌合
一番左勝　残菊　上総君
かきほふるねてふ菊のうつろひは
かさしのたねにうへてけるかな

右

おのつからのこれる菊を初春に
俊頼云前哥ハ手ゝけかゝれしもの
なるをそのおきつゝ耳ふるさとにもれ
いう後哥ハ人のしらぬ事ゑ
未の世までいふつゝもとくへ
さかれしもの也

とぢめとて
左の勝くらも基俊云勝ふ句へき
菊とまて哥やさ侍るにやしの
のやとかいふるさとにうへたる
ものなるをやうの女なつさへたる
哥かゝれと次の哥
のこれる菊をいくそのくら
なりもいかゝ侍るにつきふ
ありしを聞れ侍るうふるさと
ハ誰の方さ今一ハ海辺のさと
てむつまし

金葉集十

よもの海代波よりくるみるめ刈なまてそのみふ川なから

頌寿

新千載集雑上

移舟をそ秋川のそれそうちそてそらめ哥枕

さつきやみといふ事

新拾遺集雑下

毎のくれ哥いかゝ消のこるやとやそうの秋の夕をいふ事

残菊

元永元年十月内大臣家歌合一番右

おのつからのこれる菊ハ初霜ハ我をけぬとそよへらん

躑躅　家集

初瀬川きしの岩つゝ白つゝ咲にけらしとそ思ふ

恋

左のつゝみふつくゝほくゝのめくまて

大和本草云蜻蜓ハ今ノ陶隠居本草註云八月鳴者也蜻蛉同物ヤ潜確類書云リ本草一色青紫ノアリ今按黒色ナルモアリ蜻蜓夏ニ鳴ク八月暁ニナク俗ニクシコシトナク云モノ也長キ一寸ニ不足蜻蜓ヨリ小ナリ本草和訓鈔云ツクツクホウシ寒蝉形ツ長五分ヲ許声高シ七月比多シ色青キ青キモノアリ

拾遺　鏡山をせ侍るとて
鶴のこゑをいつけをせて
伊勢
千年とるおふくのむらふ住
たつのこゑをそきくらん

大木夏三

我やとのつゆよりおくやそらむらくもといふ虫のめくるゝ

山家　文集

大木雑十二

おちくるかこのつり舟くれそめて

此歌ハ田上にてそれらほとゝきすの口をきゝて秋うらふれハ沖舟の口もきゝてとよめり

家集　恋の歌中

大木雑十四

みえぬおもかけやうつゝ夢の渕

音羽の渕

大木雑八

ふるみちをさそひつゝ侍るくるまのおとをきゝて

家集雑歌中

歌枕拾葉云此哥の心月を玉兎と
いへる月をよめるうへに人をまち
出るよすがもふや道橋とかけ
るなどいふ心にも由緒あるべし
唐逸史云羅公遠鄧州人開元
中中秋夜侍元宗於宮中翫月
公遠奏曰陛下莫要下至月中看
否乃取拄杖向空擲之化為大橋
其色如銀請元宗同登約行數十
里遂至大城闕云是月宮行道
橋と聞るもふみ入此故事よくあ
へるや 別て又故ある事ぞかし

夫木抄 雜九

月こそはたのみ渡せてわたりけれ
ちぎりをかけし人の心を

百首歌

夫木雜十七

雨ふれはあまのかるもの夢よはく
遠のそらなる山ぢの玉こそ

後頼

夫木抄 春六

玉の井はこころあれやふかくすむ
月のうつれる

後頼

此哥 堀川院御百首ふるき山ぢの玉こそ
月もくもらぬ

後頼

此歌 壬二集ふるき山ぢの玉こそ家隆卿の哥
哥林拾葉

秀句 八七ひとつの月七つの
月のうつるらむ

後成

同

萬題集要抄 此哥八俊成卿ふるき山ぢの玉こそ
類句 ねざめしてあるよの月
なれ

後頼朝臣の哥

此二首いつれも俊哥
藏玉集

唐国もありなん事いさそらも
月もあやなく隔らむ

後頼

同

月やあらぬ春や昔の
月ぞ

同

此三首朝臣の歌ともいまだ筆のついでなし

柿本影供記六月十六日

古今著聞集

元永元年六月十日修理太夫顕季卿六条東洞院亭ふ
て柿本太夫人麻呂供を行ひ件の人麻呂影
房朝臣新〳〵夢見て圖繪をる也左右手ふ紙をとり
右の手ふ筆を採て年六旬そうの人也云〳〵當日影前
小机を立て飯一坏菓子やう〳〵の魚鳥等をそなへ
但をのゝ多作りて實物はあらす前木工頭後頼朝
臣加賀守顕輔朝臣前兵衛佐顕仲朝臣大學頭敦光朝
臣少納言宗兼前和泉道經安藝守為忠等也次ゝ饗膳
ばもう亭主 顕季卿 申されるゝ初献ハ和歌の宗匠つ
とめらるゝ〳〵滿座一同〳〵それゝ後頼朝臣座を立て

影前ニ進ム顕輔盃ヲ取テ人麿の前ニ置，道經小銚子
ヲ採テ盃ニ入テ机の上ニ置く各座ヲ歸つゝて勸盃
あり云く次ニ和歌ヲ講ス水風晩来　源俊頼
タヘさや妙音の境ニ入ぬれハ風よかけ一そうみて
前本ニ頭後頼朝臣のそゝより
基後集
澄ヲ月ふれひくうきくもおほけなくもそらめさうれ
う雨一
基俊
名ふゝきあゝよの月けなゝゝむさのみよ
前本ニ頭俊頼ヲ探集うけ云ふてあゝむ歌ヲ
いゝゝ一ふつゝふゝそゝて

顕輔卿集
金葉集
家の風妙ふものかゝ
う雨一
いゝゝふゝのゝの葉ニゝ本ゝきやゝの風のちけゝふ

言塵集
山川のおゝひゝゝ人のかゝほよ新今叶それいかゝうまけゝる
後拾の哥合也是ハゝれをゝ也ゝよけをう今ゝ也ゝ底
の魚ゝ上ふうふをゝゝ泳ゝ泳りかゝ
ゝう沿ふ泳り

續古事談
堀川院御時内の女房車あゝ色ゝの絹出ゝゝて
花見ニ花山へ向ゝれりゝゝ上達部殿上人馬車をつ
らゝて相随ニ女官ゝゝ馬ニのりてゝゝゝ栗栖野の辺ふ

藻汐草云ゝよ　山川のゝゝひの上の
ゝゝよふゝ云ゝゝゝ云ゝ水ニ我影ゝ
つゝゝ水底の魚ゝうゝひゝゝゝ云ゝゝ
ゝひのゝゝのゝとよゝゝ翡翠のやうニ聞
えたりゝ依
異名分類云ゝゝゝ云鳥ゝゝ古事記歌
ニ翡翠ゝとゝゝゝ云りゝゝニ十通一
俗ゝゝゝゝ云ゝゝ一
万代集東路のゝやゝ沿のゝゝはよ花時
ゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ有歌の外
ふゝゝゝ沿ありや考へ一

所載諸書後頼朝臣歌數

金葉集	三十六首
詞花集	十一首
千載集	五十二首
新古今集	十一首
新勅撰集	十三首
續後撰集	三首
續古今集	十四首
續拾遺集	五首

て車あり花と折て薫ゝさゝり是を見て東さゝ
かれぬ人ゝれ府生行高ゝある侍つゝてたゝ
行高ゝをつさてこゝへ車より扇のつゝを折て歌を書てたゝ
されを取てゝり多ゝりこの車ゝ肥後君返歌せゝり花山ゝ折
つゝてゝゝりとあけて砌のもとゝ置をゝさて管絃ありゝり
蔵人廣房題を出し序をかく杯酌たゝ有て後頼朝臣連歌
ゝゝをまちゝる山もとゝゝこの郎
師時朝臣つけてゝゝ むけてゝる大ゝゝやかゝとて
内ゝゝりゝゝりて歌を講ゝゝりさゝもみち折川ゝ車と着
ゝけい中宮女房ゝりゝゝみゝゝさ事を世のゝゝいゝゝる

新後撰集　四首
玉葉集　七首
續千載集　六首
續後拾遺集　六首
風雅集　十六首
新千載集　五首
新拾遺集　六首
新後拾遺集　三首
新續古今集　十二首
後葉集　十九首

續詞花集　十一首
雲葉集　十七首
月詣集　七首
萬代集　四十首
夫木集　四百五十五首　歌林拾葉三十六首
類題集　三百九十五首　除重出歌廿三首三百七十二首
明題集　百四十一首
袖中鈔　四十首
和訓栞　四十五首
古今類句　二百十首

發行書肆

京都三條通升屋町　出雲寺文次郎
同寺町通御旅町　田中屋治兵衛
江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　四丁目　須原屋佐助
同　芝神明前　岡田屋嘉七
大坂心齋橋筋北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　安土町　河内屋和助
紀州若山駿河町　坂本屋喜一郎
尾州名古屋本町四丁目　永樂屋正兵衛
參州新堀　深見藤吉